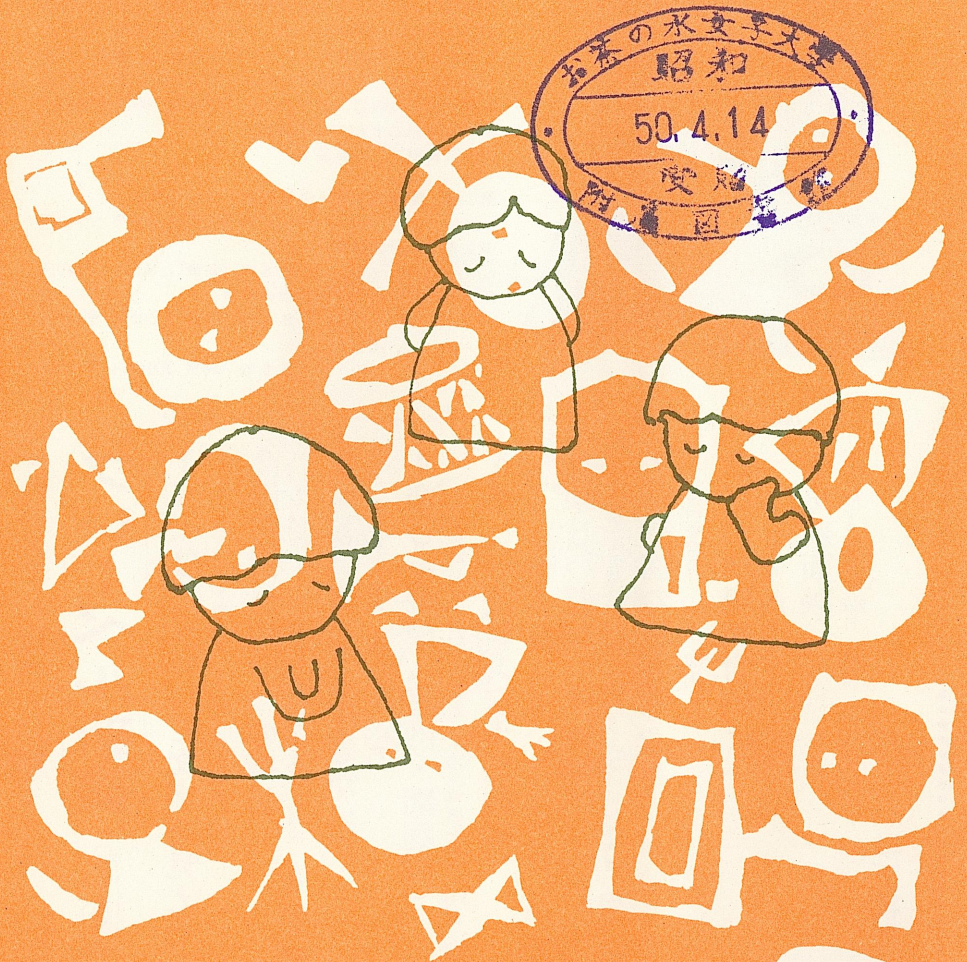


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



保育界の先駆者倉橋惣三

倉橋惣三選集〈全4巻〉

くり返し読んでいただきたい本です



わが国幼児教育の基礎的な理論を集大成し、熱心な指導と啓蒙によって、幼児教育界に多大な貢献をなした倉橋惣三先生の没後10年を記念して刊行された選集。名著として古くから愛読されてきた「幼稚園真諦」理想と反省を述べる自伝「子供讃歌」自らを園丁と任じた「幼稚園雑草」珠玉の随想「育ての心」「保育案」等々を取り、幼児教育を志す人々の必読書。
東山魁夷装丁。美装製本。

- | | | |
|-----|------------------|-----------------------------|
| 第1巻 | 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル |B 6判 410頁 2,000円 千140円 |
| 第2巻 | 幼稚園雑草 |B 6判 444頁 2,000円 千140円 |
| 第3巻 | 育ての心・就学前の教育 |B 6判 454頁 2,000円 千140円 |
| 第4巻 | 保育案他 |B 6判 454頁 2,000円 千140円 |

★保育者とお母さんに贈る――

フレーベル新書

(B6変形判)

- | | | |
|---|-----------------|--------------------------------------|
| 1 | リナはどうやって文字を覚えたか | F・W・フレーベル著 莊司雅子訳 152頁 380円 |
| 2 | 保育者への一つの指針 | 平井信義・乾孝・金沢嘉市・城戸幡太郎・八杉龍一 共著 180頁 470円 |
| 3 | 対談 しごとと生きがい | 〈聞き手〉多湖 輝 192頁 470円 |
| 4 | 楽しい遊び 〈室内・園庭編〉 | 日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎共著 144頁 500円 |
| 5 | 楽しい遊び 〈伝承遊戯編〉 | 日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎共著 114頁 480円 |
| 6 | 楽しい遊び 〈園外編〉 | 日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎共著 144頁 500円 |
| 7 | 自然物のおもちや | 滝田要吉著 152頁 380円 |
| 8 | 私の幼児教育論 | 三木安正著 176頁 420円 |
| 9 | 母親面談 | 昌子武司著 228頁 550円 |

(以下続刊)

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03) 292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十四卷 第五号





幼児の教育 目次

——第七十四卷 五月号——

©1975
日本幼稚園協会

表紙	三好碩也
カット	中島英子

五月最後の日……………矢沢 宰……………(4)

生活時間からみた親子関係

——十二ヵ国の生活時間比較調査報告書から——……………山室周平……………(5)

心理学の立場から現代の幼児教育を考える(三)……………黒田実郎……………(12)

私の幼児教育論 VII 保育の基本(五)……………神沢良輔……………(16)

遊びをめぐる夢想(その二)

——「変身」の系譜——……………本田和子……………(20)



はじめ.....村田修子(26)

韓国幼稚園教育の発達.....李相琴(28)

障害児と共に.....佐伯幸雄(32)

幼児の遊びに関する四つの断章.....南舘忠智(36)

★講演

幼児との教育について思うこと―その二―.....河辺杲(43)

こすもす保育園見学日誌.....竹田都志子(53)

赤ちゃんのおみそや.....福井達雨(60)

五月最後の日

矢 沢

宰^{おさむ}

私の手は糸束をにぎり

君の手はせわしく糸玉を舞う

その手と共に

君の小さな口もとは

小雀が餌をあさるように動く

私は君の言葉をはにかんで受ける

朝飯前の一時^{ひととき}

夜来の雨はからりと晴れ

五月最後の空はどこまでも

青く輝き

庭の木や草々は

若い生き生きとした息を放つ

風は ポプラの小枝をわたり

部屋のリチャックの白い花を静かにゆする

君は立って

私は寝て糸束をにぎる

五月生れの詩人、矢沢宰の詩集『少年』から五月の詩をえらびました。十五歳の時の詩です。一九六六年三月十一日、二十一歳の生涯を終わるまで、病氣とたたかいながら書きためた詩のかずかずは、先に出版された『光る砂漠』でおなじみの方も多いと思います。

この『少年』は昨年秋にご紹介しました、ブッシュ・孝子の詩集『白い木馬』について、同じように周郷博先生編で、秋に出版されました。あとがきに先生は、

「十四歳の十一月三日から一日も欠かさず書きつづけた『日記』と、初めは俳句やペン画、いたずら書き、間違ひ字が目立つ、詩を書きつけた帖面が十九冊——中略——貧しい帖面に、寝ていて詩（のようなもの）を書きはじめていた。その「入り乱れた文字」を追っていくと、「ぎらぎらすることは（詩）」がそこにみつかると書いておられます。

周郷博編矢沢宰詩集『少年』サンリオ出版より

生活時間からみた親子関係

—十二カ国の生活時間比較調査報告書から—

山 室 周 平

はじめに

ウィーンにある「社会科学における調査と記録化のためのヨーロッパ提携本部」(European Coordination Centre for Research and Documentation in Social Sciences)が取まとめ役となつて、ベルギーのブラッセル自由大学社会学研究所およびルーヴン・カトリック大学政治・社会学研究所、西独のケルン大学比較社会研究所およびドルトムント社会調査研究所、フランスの国立統計・経済研究所、ハンガリーの科学アカデミー社会学的調査グループ、ポーランドの科学アカデミー哲学・社会学研究所、ユーゴスラヴィアの社会学研究所、ソ連の科学アカデミー経済学研究所以ベリア支部その他の諸機関を中心に、ソ連、ポーランド、ユー

gosラヴィア、ブルガリア、チェコスロヴァキア、ハンガリー、東独、西独、ベルギー、フランス、米国の他にベルギーが加わつて十二カ国の生活時間に関する比較調査が実施され、その報告書が、過般、全巻大版八六八ページにおよぶ大冊。Szalai, A. (ed.), *The Use of Time—Daily Activities of Urban and Suburban Populations in Twelve Countries, 1972* となつて刊行された。

この本の編集者 Szalai, A. (ハンガリー科学アカデミー会員、ニューヨークの国連 Institute for Training and Research 在勤)らが、調査実施の経過について報告しているなかで「社会主義国と資本主義国の社会学者の実証的な社会調査で、これほど広がりをもつた多数国家間の協力が行われた前例はなかった」が、調査の実施という当面の要請に即して、関心領域や具体的な概念や

方法の相違を相互に理解し、調整しようとする関係者の熱意と努力によって、両者の政治的、イデオロギー的な相違が必ずしも決定的な障害とはならないことが立証されたといっているが（一九一九ページ）、そのような関係者の努力がみのつて、「体制」の相違が、末端の国民大衆の日常的な生活のいわば「体制」にあまり相違をもたらしていないかどうか、またもし相違していたとすれば、どのような点で、どの程度に相違していたかを、同一の客観的な基準によって計測し、確認することができたのであって、そのことの意義はまことに深く、かつ大きいものであったと考える。

さて、調査は関係国間の慎重な協議の結果にもとづき起草された、一〇〇ページにおよぶ詳細な手引 (Instruction Manual) にしたがって、一九六五年から同六年にかけて各国において平行的に実施された。

調査対象は十八歳—六十五歳のいわば生産年齢の男女、ただし同一世帯に本人を含めて、勤め人 (employed) を一人以上含むものでなければならなかった。

調査地は人口三万から二八万程度の中小都市および近郊—巨大都市を欠く国が考慮に入れられたのであろうであり、具体的に

はソ連の Pskov フルガリアの Kazanlik、ポーランドの Kraguievac および Maribor、ハンガリーでは Győr、チェコの Olomouc、ポーランドの Toruń、東独の Hoyerswerda、西独では Osnabrück、フランスの六都市、米国の Jackson およびバルルの Lima-Callao であるほか、ベルギーおよび米国からは全国的な調査の結果が提出されている。

元来、この調査は、出勤日（または週日）と、休日（または週末）のそれぞれの一昼夜二十四時間にわたる日常的な生活行動の実態を自記と面接によって克明に記録した「生活時間 (Time Budget) 調査」であり、とりあげられた生活行動の種類も多岐にわたっているが、ここでは、それらのうち親による「子どもの世話」(child care) に絞って、調査結果の一部を紹介したい。

十二ヵ国における子どもの世話

この報告書ではとくに「十二ヵ国における子どもの世話」(Child care in twelve countries) という一章が設けられ、しかも、この章を担当しているのは、各国からの資料全体の集計や分析に当たって「社会科学的なデータにたいするコンピュータ分析の一権威」として、また特別委員の一人として活躍した（二六ページ参照）、米国の Stone, J. (ハーヴァード大学) その人であ

第1表 12ヵ国の親は子どもにどれだけの時間をかけているか

(国別、性別、勤めの有無別、出勤日および休日別時間量—単位分—)

	ベルー (Lima-Callao)	ソ連 (Pskov)	ユーゴスラヴィン (Maribor)	ユーゴスラヴィン (Kragujevac)	ハンガリー (Győr)	ポーランド (Toruń)	チェコスロヴァキア (Olomouc)	ブルガリア (Kazanlik)	東独 (Hoyerswerda)	西独 (Osnabrück)	西独 (一〇〇地区)	米国 (四四都市)	米国 (Jackson)	ベルギー (全国)	フランス (六都市)
子を持つ既婚の勤め人(男性) 出勤日 休 日	6 11	41 53	23 39	14 16	29 44	29 46	25 32	17 15	19 48	12 14	11 26	12 27	12 24	11 19	13 25
子を持つ既婚勤め人(女性) 出勤日 休 日	34 83	44 102	36 72	38 68	43 83	46 82	37 73	28 34	44 96	56 47	70 79	50 38	27 41	37 48	64 60
子を持つ専業主婦 週 日 休 日	69 34	79 118	62 73	41 33	76 39	94 29	119 55	84 不明	112 116	106 49	96 57	100 78	101 80	75 29	136 108

注 P. 250 Table I.の一部を引用

るので、彼がこの章のなかで掲げている統計資料も、それだけに信頼してよいものであるだろう。

さて、Stoneによると、この調査では、子どもに関連した親の生活行動としてつぎの九種がとりあげられている。

- 1 幼児の世話
- 2 より年上の子どもの世話
- 3 学校の勉強をみる
- 4 学校以外のことについて読んだり、きかせたりする
- 5 うちのなかでの遊びや手仕事の指導
- 6 うちの外での遊び、外歩き
- 7 医療に関係した世話や、その他の子どもの健康に関係ある行動
- 8 子どもの外出
- 9 その他

がそれであった。これらのうち、8の「子どもの外出」および、「主な」(primary) 行動として行われる以外の付随して行われる「……ながら」の行動を除く八種の行動のために費された二十四時間内の時間量を出勤日および休日別、親の性別や、さらには国別等によって分析した結果第1表のごとき結果がえられたというのである。

この表でみると、どの国でも女性、ことに専業主婦は勤め人(男性)より長い時間を子どもにかけており、その点では東側も西側も、それほど差がないようである。しかし細かくみてゆくと、勤め人(男性)と勤め人(女性)の間の出勤日における格差がソ連、チェコ、ユーゴ、ブルガリアの東側諸国では、西側のフランス、ベルギー、米国、西独に比べて概して少なく、ことにソ連の場合のごときほとんど差がみられなかった点が注目されてよいだろう。

これにたいして、平日ほどには重要でないともいえようが休日においては、ソ連はじめ東側の多くの国の勤め人(女性)は平日より長くなっているのみならず専業主婦なみに延長されているので、その意味では「休日」が休日にならない場合もありうるだろう。他方、西側の勤め人(女性)は、平日とほとんど変わらないが、フランスの六都市や米国の四四都市のごときは、かえって減少しているといった対照的なちがいをみせている。これにたいして、男性は東西とも、女性よりはるかに少ないところが多い点で似たりよつたりであり、休日に僅かながら延長される傾向がある点も共通している。

なお、Stone は、東側諸国と西側諸国のそれぞれの平均値によって両者を比較したつぎのような表(第2表)を示しているが、

第2表 東側・西側平均の比較(単位分)

	子をもつ勤め人(男性)		子をもつ勤め人(女性)		専業主婦		
	西側	東側	西側	東側		西側	東側
出勤日	11.8	24.6	50.7	39.5	週日	102.3	84.6
休日	22.5	36.6	52.1	76.2	週末	66.8	66.1

注 P. 253 の Table 2 から引用

第3表 休日に勤め人女性と居合わせた夫(present)と子の時間量(単位時間)

	ベルギー(全国)	フランス(六都市)	米国(Jackson)	米国(四四都市)	西独(二〇地区)	西独(Osnabruck)	東独(Hoyersweide)	ブルガリア(Kazanlik)	チェコスロヴァキア(Olomovec)	ポーランド(Torun)	ハンガリー(Gyor)	ユーゴスラヴィア(Kragujevac)	ユーゴスラヴィア(Maribor)	ソ連(Pskov)	ペルー(Lima-Callao)
子どものみで夫不在	1.4	2.0	2.2	2.9	2.5	1.9	3.3	不明	2.7	3.1	3.5	3.1	2.5	3.5	2.3
夫、子ともに居合わす	4.7	2.9	3.3	1.9	3.4	4.7	2.2	不明	4.4	3.3	3.5	4.0	3.4	3.0	1.9
夫のみで子は不在	5.3	4.2	3.4	2.5	3.5	5.3	2.4	不明	3.4	3.1	2.7	3.2	2.9	2.8	1.0

注 P. 250 の Table I の一部を引用

この表からみても、以上にのべた点がほぼ裏付けられているようである。

つぎの第3表は、休日に勤め人女性と居合わせた (present) 夫および子どもの時間を示したものである。

この表によると、東側では勤め人 (女性) が子だけと居合わせる時間量と、夫だけと居合わせる時間量を比較してみると、両者の間にはほとんど差がないか、子のみと居合わせる時間量の方がやや長いのに對して西側では逆に子だけよりも夫だけと居合わせる時間量の方が長い国が少なくない。その点からいえば西側には「夫婦中心」な傾向があるといえるであろうが、これにたいして、父、母、子の三者が居合わせる時間量の点では東も西も余り差がないようであるが、ただ東のチェコ、ポーランドおよびユーゴの二つの都市等ではいずれもこの三者が居合わせる形態が他の二つの形態を上回ってもっとも長いので、いわば「家族中心ないし家庭中心」な傾向があるといえるだろう。また母子だけが居合わせる時間量のもっとも長い、いわば「母子中心」の傾向がみられるのは米国の Jackson、東独、ソ連およびベルーというふうに東西とはあまり関係がないようである。

Stone は、以上の他、八種の生活行動に限定せずに親が子と過

ごす (spend with children) 時間の総量についても集計しており、それを子の数や、子が三歳以下であるか、それ以上であるか等によって分析しているが、その詳細は、ここでは割愛するほかないだろう。ただそのような分析の過程で明らかにされたいくつかの興味ある点にふれているので、そのいくつかを紹介しておく。

一つは、母親が勤め人になることによって子と過ごす時間量がどの程度減少するかを子の数別、子の年齢別に専業主婦との対比によって計量し、それが東側と西側でどの程度ちがうかについて調べている。すなわち第4表にみるように、東側では、いずれの条件のもとでも、約六〇%で、ほぼ同程度の減少を示すのに対して、西側では四歳以上、および二人以上の子がある場合は東側よりやや上回っているが、三歳以下のこどもの場合にはほぼ半減し、「とくに厳しい (particular severe)」状況がみられる。(P.258)。

いまひとつは、子一人の家族において、子の成長 (三歳以下から四歳以上への) が、子と過ごす (spend) 時間にどのような影響を与えるかについての分析である。

それによると、第5表にみるように、東も西も四歳以上になると母親が子どもと過ごす時間は相対的に減少し、逆に父親が子どもと過ごす時間は相対的に増加している。また、勤めの母親の場合、東側では約二〇%方減少しているのに対して、父親の側の増

第4表 子どもと過ごす(spend)時間量に
与える母親の勤めの影響(%)

	子 1 人		子2人以上
	3歳以下	4歳以上	
東 側	60	63	63
西 側	52	70	65

注 P. 258 Table 6 より引用

第5表 子どもと過ごす時間量に与える子ども
の成長(3歳以下→4歳以上)の影響(%)

	専業主婦	勤め人(女性)	勤め人(男性)
東 側	75	79	1.10
西 側	72	96	1.26

注 P. 258 Table 7 より引用

加にもかかわらず、ほとんど減少せず、ここでも「厳しい」状況がみられる。

なお、この点に関連して、母親だけで子どもと過ごす時間量が子どもの成長(3歳以下→4歳以上)によって、どのような影響をうけるかであるが、第6表にみるように西側がほとんど影響を

第6表 母親だけで子どもと過ごす時
間量に与える子どもの成長
(3歳以下→4歳以上)の影響(%)

	専業主婦	勤め人(女性)
東 側	.23	.11
西 側	.07	.06

注 P. 258 Table 8 より引用。

っている。

それらを含め、全般を通じてうける印象は、生活時間にみる、東と西の親子関係の相違は、概して、それほど際立ったものではないということである。勤めている母親の子どもの世話が、東側に比べて西側のそれにはややきびしい点もあったが、男性の参与は、ソ連の出勤日にもなるような男女間のバランスの例がないではないし、子どもの成長にともなう若干の増加があったとしても、全体として女性に比べてはるかに少ないという点で、東も西も五十歩百歩の観がないではない。

しかし、そのような点についても、なお、この本の他の章でと

うけないのにたいして、東側では、軽微ながら減少がみられる。

おわりに

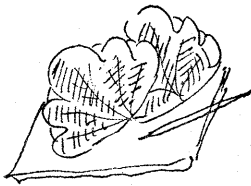
以上の分析の他、Stone はこの章のなかで、子どもの世話がどの時間帯で行われるかのグラフによる国際比較や、結婚、子の出生、母親の勤務や、子の成長がレジャーの時間量にどのような影響を与えるかなどの分析をも行

りあげられている労働時間や家事時間のありかたを検討し、とらえ直してみる必要があるし、保育のありかた、たとえば、その社会化というような条件も、その際考慮にいれられねばならないことはいうまでもないが、ただその点については必ずしも完全でなかったと Stone 自身が断わっている (P. 263) ことは含みにおかねばならないだろう。

ともあれ、この調査によって、政治や、イデオロギーのちがいはそれとして、国民の卑近で、日常的な生活の営みについて客観的なデータにもとづいて、お互いのちがいを、共通点を認めあうことができるようになったことの意義は、まことに深く、かつ大きいものがあると考えるのである。

(お茶の水女子大学)

後記 一ニカ国調査の結果を、日本のデータと比較し、位置づけることは残念ながら、同一時点での同一方法による調査が行われていないので不可能といわねばならない。しかし、そのための手掛りとしては日本放送世論調査所の「国民生活時間調査」がもっとも役立つだろう。筆者の「昼・夜間世帯人口論」(社会学評論六三、一九六六年)や「現代家族における分散と集結—ゼルデイチの見解との関連において—」(家族問題研究会編「現代日本の家族—動態・問題・調整—一九七四年、培風館、五—二〇ページ)なども、主として、このデータにもとづくものであったことを申し添える。



心理学の立場から

現代の幼児教育を考える (三)

黒田実郎



一 性格理論の変遷と幼児教育

旧約聖書の箴言^{しんげん}十三章二十四節に、「むちを加えない者はその子を憎むのである。子を愛する者は、つとめてこれを懲らしめる」という言葉がある。聖書の教えが絶対視されていたヨーロッパでは、従来、子どもに対してかなりきびしいしつけが行われてきた。もちろん、旧約聖書のみを信じるユダヤ教徒とは異なり、キリスト教徒は、きびしい戒律を説く旧約聖書と、無限の愛を説く新約聖書を、ともに聖典とみなし、その教えに従ってきた。したがって、キリスト教的文化の中で育ったヨーロッパの学者の教育理念を理解するには、彼らの思想の根底に、旧・新約聖書の教えのあることを決して見逃してはならないのである。

たとえば、ベスタロッチやフレーベルは、人格形成における母親の愛情の必要性を強調したが、究極的には、母親の愛情を通し

て、子どもに神の存在を意識させ、規律正しい習慣を養わせることが目的であった。それゆえに、彼らの教育精神には暖かさと同様に、きびしさがあった。

わが国でも古くから、子どもの教育に関して「愛のむち」という表現が用いられてきたが、過去においては、どの国においても、子どもはかなりきびしくしつけられてきた。ところが現代の日本やアメリカにみられるように、許容主義や温情主義が一般的傾向になったのはなぜであろうか。それにはいろいろな理由があるが、おもに心理学における性格理論の変遷という立場から、次に私見をのべてみよう。

一九三〇年代にナチスがドイツを支配して以来、ユダヤ系心理学者は大学してアメリカに移住した。これによってドイツの心理学は壊滅状態におちいり、それ以後、アメリカが心理学のあらゆ

る領域で中心的な役割を果たすようになった。このため、現代における多くの国での幼児心理学やしつけの問題は、アメリカの動向を無視して考えることができなくなったのである。このような理由で、次にアメリカにおける性格理論やしつけの変遷について簡単にのべてみよう。

おもにイギリスからの移民によって開拓されたアメリカ合衆国においても、その建国当初は、ヨーロッパふうのきびしいしつけが行われていた。

就学前教育がヨーロッパから導入されたのは十九世紀後半であるが、最初はフレーベル主義が支配的であった。フレーベルの著書「人の教育」において示されているように、その教育理念は、神の法則と秩序を子どもに教えることであったから、その当時の幼児教育は、キリスト教精神にもとづいたきびしい人格教育と、教師中心の主知主義的な教育が母体であったといえよう。

ところがその後、公教育の普及にともない、信教の自由という立場から公教育機関における宗教教育が排除され、人格教育の内容が変化することになった。また自由独立の精神を尊重するアメリカの国民性と、アメリカ独自の学術、文化の向上とによって、教育学や心理学の分野でも、アメリカ生まれのアメリカ人による、アメリカ的学説が誕生した。教育学の代表的学者はジョン・

デューイ、心理学の代表的学者はジョン・B ワトソンである。

ワトソンは行動主義 (Behaviourism) 心理学の創始者として有名であるが、アメリカの幼児心理学や育児方法にもいちじるしい影響をおよぼした。彼は乳児を愛撫することのかわりに、子どもは生まれたその日から厳格に統制された刺激条件（たとえば、皮膚的接触を最小限にとどめて、人工栄養による極端なまでに厳格な時間授乳など）に従うことを学習しなければならないことを強調したが、彼の育児方法は講演や雑誌を通して、一九三〇年代のアメリカ中流家庭の母親たちに、いちじるしい感化を与えたのである。

子どもの養育におけるこのような極端な合理主義は、科学的育児という名称のもとに、アメリカで広く普及したが、そのような方法で育てられた子どもたちの中に、いろいろな性格的欠陥をもつ者がしだいに多くなるにつれて、反動的に、全く対照的な育児方法が注目されるようになった。それは精神分析学に理論的根拠を置く許容主義である。

許容主義的育児は、一九四〇年代の後半から五〇年代にかけて盛んになったが、これを推進した心理学者のひとりとは、精神分析学派のマーガレット・リブで、その主著 “Rights of Infant” は「乳児の精神衛生」という題で津守真他によって訳されている。

育児評論家として世界的に有名な小児科医、ベンジャミン・スボック博士も、一九四〇年代から一九五〇年代の中ごろまでは、精神分析学にもとづいた許容的育児の推進者であったが、一九六〇年ごろから、彼の主張はかなり中庸的なものへと変わっていった。一九六七年に彼は「モンテッソーリ・スクールと伝統的アメリカン・ナースリー・スクール」と題する論文を書いたが、そのころの彼はモンテッソーリ保育とアメリカ的自由保育とは質的に相違するものではなく、たんに量的な相違にすぎないことを指摘し、幼児保育の面でも中立的な態度をとっていた。ところが最近になって、彼は子どものしつけや教育に関して、極端に権威主義的な態度を示しはじめた。彼は自己批判書の中で次のように述べている。

「権威のない教育はありえない。義務と罰則のないモラルもありえない。父兄よ、私の本を焼け、そして『愛する子にはムチを』という古来の教えに戻ろう……」

「スボック博士の育児書」は、アメリカだけでも二千万部以上が売られ、英連邦諸国や日本などでもかなり読まれているので、彼の影響力はアメリカだけではなく、世界的なものだといえよう。そのような彼が時代の変遷とともに教育思想を極端に変えたということは、たんに育児上問題だけではなく、人類の文化にと

ってもゆゆしい出来事なのである。

スボック博士の主張はなぜこれほど変化したのであろうか。研究と経験の積み重ねによって主義主張が変わるのはむしろ望ましいことであるが、彼の場合、その変化は、研究の裏づけによるものというよりも、社会の変動や時代精神の変化によるものと見なす方が適切かもしれない。

一九六〇年代の後半から、若者の造反や退廃的な生活態度が次第に顕著になったが、その原因は、「スボック博士の育児書」によって育てられた子どもたちが青年期に達したためだという批判がなされた。その後、スボック博士の思想は徐々にハト派からタカ派へと移行していったが、果たして過去における彼の主張と、最近の自己批判とは、いずれが正しいか容易に判断できかねるのである。

二、むすび

スボック博士に限らず、アメリカにおける幼児教育思想や育児方法は、政治、経済、文化の変動によって、かなり左右されてきたように思われる。幼いうちに子どもを大人のきめたわくにはめ込もうとするワトソンの科学的育児法がアメリカで普及したのは一九三〇年ごろの不況時代であった。乳幼児の心理学的研究にお

いて許容主義的な論文が圧倒的に多かったのは、第二次大戦後の繁栄時代であった。一九五七年のスポーツニク・ショックは知的早期教育に拍車をかけ、その結果、ピアジェ、モンテッソーリの学説が復活し、ブルーナーが台頭した。そしてベトナム戦争の失敗による社会的混乱と最近の経済的不況は、遂に性格心理学における権威主義的傾向を助長するにいたったのである。

第二次大戦後、アメリカに追隨してきたわが国でも、許容主義に対する反動として、石原慎太郎の「スパルタ教育」や、羽仁進の「放任主義」が一般大衆に読まれたり、知的早期教育の賛否が識者の間で論ぜられたりしたが、肝心の基礎的研究はそれほど行われていない。

乳幼児の性格形成に関する理論と研究の面では、従来、精神分析学派が最も大きな役割を果たしてきたが、S・フロイトは情緒安定の要因として、生物学的欲求の充足を重視し過ぎたように思われる。

最近、英国の精神分析学者J・ボウルビイは、母子のきずなが、おもに身体的欲求の充足にもとづいて形成されるというフロイト説や二次的動因説を否定して、新理論、愛着行動制御説を提唱した。彼によると、養育者に対する乳児の結びつきは生得的反応に基因するもので、社会的、心理的接触を求める乳児の欲求

が、身体的欲求と同様に、あるいはそれ以上に、愛着性 (attach ment) の形成にとって重要だと考えられている。彼はその一例として、イスラエルのキブツの子どもの愛着性が、身体的養育者であるメタベレットに対してよりも、精神的に接触する両親に対して形成されるという事実をあげている。ボウルビイの新学説は、子どもの情緒の健全な発達にとって、成人との精神的きずながどれほど大切かということを示唆している点で、われわれ幼児教育関係者に貴重な教訓を与えるものといえよう。

ボウルビイのもう一つの功績は、比較行動学の最近の研究資料と研究方法とを心理学に導入した点である。動物や人間の生態を、おりや実験室の中ではなく、自然的環境の中で観察し、分析する比較行動学の研究法は、幼児心理学者や幼児教育学者が今後大いに取り入れなければならない点である。

政治や社会の変動に左右されることなく、ありのままの子どもを観察し、その発達の可能性を伸ばすことが、幼児研究者の課題だといえよう。

(聖和女学大学)

私の幼児教育論 VII 保育の基本 (五)



神 沢 良 輔

三 保育の基本 (五)

—— 幼児とのかかわりあいの中で ——

(VII) 必要なときに、必要なところに動けるよう、余ゆうをもつて幼児の活動を見つめる

(1)

幼児は保育者の動きを常に見つめている。それは、一方では保育者の目（視線）を追って、それによって自分の行動に対して承認をしてほしいということのためでもあるうし、他方では、保育者が自分の活動している近くにおいて見守っていてほしいとか、自分のしている活動に参加してほしいという要求によるためでもある。

ろう。

このような要求は、学級を構成しているすべての幼児がもっていることはいうまでもない。

だから、ひとりの幼児が“先生、ちょっときて”と大きな声で叫ぶので、なにごとかと思つてとんでいってみると、保育者の顔を見てにっこり笑つて、そのことだけで満足してなにもいわずに活動を続けたり、また保育者の手をにぎったりして、身体接触を求めることだけで終わるということとはよくあることである。

しかし、それだけですめば誠に結構なことであるが、ひとりの幼児が保育者とのかわり合いに成功すれば、他の幼児たちもそれをだまっていっているわけにはいかない。こんどは別のあちこちにいる幼児たちから、“先生、ちょっときて”“先生、早くきて”というようなことばが、つきからつきへと、出てきて、保育室は

保育者のとりあいのようなことになり、大きわざとなる。

このようになると、あちらの幼児から、こちらの幼児へと、保育者は、幼児たちの間をかけずり回るということだけに終始して収拾がつかなくなってしまう。

もちろん、このように保育者が幼児の要求を受容して——（感情を受容してといった方がよいかもしれない）——ひとりひとりの幼児に対応していくことは決して悪いということではない。

けれども、中には、保育者との関係はもちたいが、大きな声が出せずに、それを聞きながら、しょんぼりして、保育者から離れていくように見える幼児もある。このような幼児たちのなかには、保育者が自分との関係を拒否しているように思いこむということもあったりして、それが登園拒否などということの原因になったりすることもある。

(2)

いうまでもなく、ひとりひとりの幼児は、保育者との人間的な関係に入りたがっているのであり、このようなひとりひとりの幼児との人間関係に入ることの重要性にいつては、これまでもくり返し述べてきた。

しかし、他方では、保育者はひとりの幼児だけを対象として保

育するということとはできないということでもある。そこには、保育者のひとりひとりの幼児とともにいるという保育の基本となる構えと、それを満足させるための基本的な保育の技法があるということになる。

つまり、そのためには保育者が、それぞれの幼児とかわりあっているそれぞれの事態において、どのようにするのがもつともその場面で望ましいかということ判断する必要がある。保育とは、そのような、“保育者の判断”にまかせられていることがきわめて多いのである。

“先生、ちょっときて”とある幼児がいったときに、その幼児が保育者になにを求めているか、ということや、その幼児とのこれまでのかわりあいの経過や、今日一日の保育の流れの中でのかわりあいの中からみてどのようにすればよいかなど、いろいろのことが考えられるであろう。そして、その場面における判断が保育者の行動となってあらわれてくるということになる。

だから、ある時は、その幼児のところへいかずに、視線をあわせるだけで承認の感情を示すとか、時間的な余ゆうをもたせて、“ちょっとまってね”とか、“あとでね”とか、“○○ちゃんのがすんだらね”とかいうような反応をすることもあろう。また、ある幼児が、“先生、きて”とはじめて自分の意志をこばで表現

したような場合には当然、すぐにその幼児のもとに行つて、保育者としてのそのことに対する喜びを示してみることだつてあるう。でもこのような、いろいろな場面における判断は保育者がすることであり、しかも、一瞬の間にしなければならないことである。

もし、これらの反応に時間をかければ、幼児のきわめてはげしい「あの瞬間的な要求（行動）」やその変化にはついていくことができないということになるし、また、その瞬間に反応しなければ、あとでは意味のない行動になることが多いからである。

しかも、このようなことは、現場で保育をしている保育者でなければできないことである。第三者にとっては、客観的に事態をみることはできて、判断はできないということであり、そこに、保育者の保育者たる所以があることになる。

(3)

このような保育者の判断ということとは、保育者自身の行動をきめるもっとも基本になることではあるが、保育者が動くということとは、いったい幼児にとってどのようなことになるのであろうか。

幼児は、保育者の動きに対して注目しており、常にその影響を

受けて行動している。

つまり幼児は、

“保育者と一緒に遊びたい。”

“保育者のいる近くで遊びたい。”

“保育者に自分の行動を承認してもらいたい。”

“保育者に自分の存在や自分の特性、能力などを認めさせたい。”

“保育者のからだにさわって安定感をもとめたい。”

などといういろいろな要求をもちながら、保育者を見つめているのであり、それは“保育者と自分とがなんらかのかかり合いをもっている”ということからくる安定感につながっているとともに、また、それは自分の友だちに対しても同様に、それを認めてほしいという要求につながっている。

だから、保育者が動くということは、ひとりひとりの幼児のもっている保育者へのかかり合いのバランスが崩れるということになるのである。

換言すれば、ひとりひとりの幼児は、保育者を中心とした、力学的なバランスの中で生活しているということがいえるからである。そのため、保育者の移動は、学級という生活場の“力点”が移動したということになる場合が多い。保育者が移動すると、これまで集中して続けていた活動を、“先生がいつちまったから

やゝめた”などと簡単に打ち切る幼児がでてくるということはよく見られることである。もちろん、この逆に、保育者が入って遊んだため、そのグループの活動が急に活発になったということだってありうる。

このようなことは、幼児の発達の状態、時期——（その学級が成立してからの、その保育者と幼児とのつながりの時間的な長さ）——、遊びの経験などによっても異なることはいうまでもない。とくに、入園当初や保育者がかわった新学期などのときにおいては、いろいろな多くの問題を含むであろう。

(4)

このように見てくると、保育者が動くということは、幼児たちに非常に大きな影響を与えるということになる。

だからといって、保育者はじっとして動かぬ方がよいということでは決していない。つまりは、ひとりひとりの幼児たちの活動の状態を見つめて、“必要なときに、必要なところに動ける保育者”になつてほしいということである。また、動くときは、その意味が保育者にとっても納得できるものでなくてはならないし、また、その意味を考えながら、保育者が判断して動けるだけの余ゆうを持つべきだと思うのである。

このような意味のある動きは幼児にも理解されていることが多くいし、幼児もそれなりの対応が可能となり、それが幼児の安定感にもつながり、温かい落着いた学級のふん囲気が形成されることになる。

このようなことは、理論でいうのは簡単ではあるが、実際にはきわめて困難なことであろう。でも、すばらしい保育者の動きを見てみると、本当にむだのない、意味のある動きがひしひしと第三者にも感じとられるのである。

それは、毎日の実践の中から、保育者の自分自身に対するきびしい反省の中から生まれてきたものであろう。だから、それは、幼児と保育者がともに織りなす、一種の芸術作品であるということができる。

入園当初、若い発らつとした保育者が機関車になって、先頭に立ち、大勢の幼児たちが客車になってあとにくっついて、喜々として園庭を走っているようすは、まさにこの世の天国であり、また、一幅のすばらしい絵でもある。

しかし、保育室では、このような集団の中に入れない幼児がうらめしそうな顔をして、ぼんやりと友だちの動きを見ていることだってあるのである。

（暁短期大学）

遊びをめぐる夢想(その二)

「変身」の系譜―

本 田 和 子

「仮面ライダー」の魅力は、いうまでもなく「変身」にある。子どもらが「ライダーごっこ」に興じるとき、あの独特の身振りと「ヘンシン」という呪文によって、彼らは誰でも超能力者になり得るのだ。

子どもたちに人気の高いこれらの遊びは、もともと現代的な子ども達の生の断面としてとらえられることが多い。なぜなら、「仮面ライダー」にしても、あるいは「ウルトラセブン」にしても、主人公のモデルはブラウン管からとられる。そして彼らは人間以外、すなわちサイボーグもしくは宇宙人であり、戦う相手は地球以外の他の星からの侵入者である。どの要因をとっても、すべてが時代を象徴するように思われるのも無理からぬことであろう。

しかし、「変身する主人公」は、果たしてテレビ文化の落とし子だろうか。私どもの歴史は、その背後に無数の「変身譚」を産み出しているのではないか。神々の時代に、美しいダフネは月桂樹に化身し、アドニスの死はアネモネの花をこの世に生み出した。

水の辺で、自身の影に見入ったナルシスが、水仙と化したことは周知のとおりである。日本の民俗も、鶴女房や狐葛の葉など、「変身物語」に事欠かない。沢沢龍彦氏の言を借りるまでもなく、変身を抜きにしては何事も語り得ないほど、それは人類の揺籃期の想像力と、密接不可分な結びつきを示しているのではないか。

人類の歴史を貫いて根強く流れ続ける「変身願望」に焦点を当てるなら、そこには、人の心の奥深く横たわる普通の相が見いだされるのではないだろうか。たとえば、もう一人の自分、あるいはもう一つの生を希求する人間の願い、また、転世によって時間からの脱出を試みる永遠への憧憬など、さまざまな人の想いが浮かび上がってくるであろう。

◆ ◆ ◆
ギリシャ神話には、先に引いたように、植物に変身する物語が少なくない。沢沢氏らの指摘のように、これを「永遠の生命のシンボル」と見ることも可能であろう。すなわち、「人間は植物に

変身すると、その生命を植物の生命を連続させて一種の不死の状態を獲得することになるからである」

ダフネは、特定の一本の月桂樹に変身したのではない。月桂樹はすべてダフネの化身であり、どのアネモネもアドニスなのだ。

春の訪れと共に、月桂樹は常に緑に芽ぶき、アネモネはいつの時代にも美しい花を開かせる。そのめぐりは、おそらくは世の終わるときまで変りなく続くに相違ない。植物への変身は、まさに原始的な生命の連続感の現われであった。

わが国の古説話の中に、屍体化生を五穀発生の起源とする物語が幾つか見いだされる。たとえば、記紀神話中のウケモチノ神やオオゲツヒメの説話がそれである。屍体から穀物が発生する類話は、東南アジア一帯にも広く分布していて、共同体の祖霊信仰とのかかわりで考えられている。

ところで、共同体の祖霊たる穀母神とは、そもそも穀物の霊が神格化されて神の姿をとったものなのか、あるいは、穀物に変身した祖先の一人なのだろうか。ここに見いだされるのは、人と植物と、いずれが先、いずれが後ともわかり難い密接不離な融合と連続、そして、果てしない循環の相ではないだろうか。

人間と宇宙の一切のものは、同じ霊の所有によって等しく生き、その霊の入れものである外形は、さまざまな姿をとることが可能であった。霊は、人であれ、あるいは動植物や無生物であるかを問わず、あらゆる存在をめぐり、それらに宿るものだったのである。



「変身」への憧れは、これら物語の世界に仮託して現わされているだけではない。私どもの歴史は、自身の肉体という一つの入れ物に神霊を招き入れることによって、神への変身を成し上げた人々を点在させている。多くの原始宗教、あるいは民間信仰を司るシャーマンたちは、その典型例であろう。

シャーマンの誕生に関しては、二つのタイプが指摘されている。一つは、それぞれの宗教派・教団によって正式に設けられた宗教的訓練に従事し、それらの行事を施行する過程で、忘然自失、入神の域に達し、法悦の境地で開悟し、霊を受け入れる場合である。卑近な例では、東北地方のイタコなどその好適例と見られよう。今一つは、ある日突然、それこそ本人の予期しない形で神霊界との交流が可能となり、神意を語る者に変身する場合である。沖縄のユタなど、この系統に属す例であるという。

人々はこうして、己れを神へと変身させた「恵まれた人」を囲

んで、神霊と交流する機会を持った。「神ごと」すなわちさまざまな「祭」の展開である。シャーマンに神が現われるまで、それを囲んで待つ人々は、それぞれの役割において呪的な行為をくり返し、シャーマンの変身を助けるのを常とした。そして、変身が成就し、神が祭礼のにわに立ち現われたとき、興奮し激情した人は、忘我と陶醉をシャーマンと共にした。

祭礼のざわめきの中で、人々は、日常的理性と絶縁し、秩序の破壊者となった。暴れみこしはためらいもなく家々の軒先を襲い、祭のにわの酒宴は多く無礼講であったという。ここに見られる日常性の遮断と聖なる時空間の出現、そしてそこに生きることによって日常を超越することは、一つの「死と再生」の儀式でもある。人が祭のにわで己れを忘れるとき、日常的なきずなに縛られていた昨日までの自分を抹殺して、神と交わる者として新たに誕生した、ということになるのか。

こうして、祭礼にどう人々は、変身を実現するシャーマンを媒介としつつ、みずからも、より新たな存在へと変身をとげたのであった。

ところで、人に神が具現する「人神」という現象に関して、「神が人に宿る」すなわち霊が下生軌道をたどる場合と、「人が神

と化する」すなわち神が上生軌道をたどる場合とを考えることができる。神霊がその本体から離れて人の中に入り給うのか、あるいは人の霊が上昇し神々と融合して一体と化するのだろうか。わが国の場合など、後者も充分に考え得るのではないか。死者の霊は祖霊に転化して、「祭られるもの」となり得る国なのだから。

祭のにわで神を招くシャーマンたちの憑依体験も、神の霊がシャーマンの肉体から人の霊を退けて入り込むのか、あるいは、シャーマンの霊が肉体から浮遊して神霊の高みへと上昇し、そこで神々と合一するのか、いずれと見るべきなのだろうか。神が人へ、あるいは人が神へ、変身の道は融通無碍、まさしく変化自在なのかもしれない。

わが国の場合、神々もまた「変身」をいとわなかった。各地に見られる権現信仰は、その典型例と考えられる。権現の本体は、釈迦・大日・薬師・阿弥陀など無数の諸仏諸菩薩であるというが、これらが神社の祭神となっていことからみて、神仏習合の申し子であることはいうまでもない。そして、権現とは「仮りにその姿をこの世に現わす」という意である。

招かれたなら、その招きに応じて「仮りに姿を現わす」、田仕事るときは田の神として、海上のいさどりに際しては海の神とし

て、随所に出現して神意を告げ、人々の祈請に答える。「権現」とは、まさに「変身する神」ではないか。

私どもの祖先たちは、神々にも変身を要求し、神々もまたそれに応じて自在に変化した。桜井徳太郎氏の言を借りるなら、「天つ神、国つ神、八百万の神々が無数に出現し、神仏混じりの仏神が遍在する。そこにわれわれは日本の神における変身の論理をみることができ」のである。

人と被造物のすべてを霊は循環し、さらには、神との間の交流も可能である。そして、神々さえもさまざまな形に出現してその「変身」を具現する。私どもの祖先たちは、こうして幾重にも交錯する「変身の論理」に支えられ、それらを己れらの生に反映させながら、その歴史を織り続けてきたのであった。



「変身」のドラマは、舞台の上でまた新たな展開を見せる。わが国の代表的な伝統芸能である「能」や「歌舞伎」など、いずれも「変身」をその中核においていると見ることもできよう。

ところで、能舞台は幕を持たず、観客の中に突出して、四本の柱と屋根で囲われた空間である。これに比して、歌舞伎の舞台は幕によって観客から区切られ、額ぶちの中の画として客席と向き

合う。前者において、能舞台とそれを取り巻く見所との関係は、共に一つの世界を構成することになり、舞台からの遠心的波及と観客の求心的な享受とが同時に働き合って緊密な連帯が生まれるのである。後者の場合、観客は、幕によっていつでも隔絶される別の世界の出来事を、ただ一幅の画として観賞するにとどまるだろう。

このような意味から「能」とりわけ武家の式楽として様式化される以前のそれは、「神事」の面影をいまだ色濃く宿していたといえよう。観客はすなわち、神々の訪れを待つ祭礼のにわの村人たちであった。シャーマンが超越的他者と合一するのと同じ機能が、「過去の時間と現在の時間との不可思議な融即のなかに、神霊・亡霊の出現、前シテと後シテの『変身』・物狂いを見る」などの形で舞台上に再現され、観客は息をつめてそれらを見守り、訪れる者と交流するのである。演技者は巫者であった。今尾哲也氏の言を借りるなら、「能の芸術的表現の主要な媒体である舞と謡そのものが、すでにして、巫者のエクスタシスにかかわっている」のである。

民俗的祭式の水脈から「変身」が離脱し、完全に芸能化されたのは、歌舞伎の舞台の上であった。神がかりの有力な呪具であった仮面が捨てられ、「変身」を実現するための肉体の動き、すな

わち「変化の身振り」が考案され、さまざまな仕掛けや場面転換の手法が案出される。かつらの取り換えや衣裳の引き抜き技術が工夫され、舞台上に「変身の視覚化」が完成された。そして、劇場にどう人々は、舞台と向き合った観客という立場で、名優の妙技に酔い、感動し、涙を流した。舞台上の「変身」に融即して、自身の現実を超出する瞬間をすら持つことも、稀ではなかったであろう。しかし、彼らは、それがあくまでも舞台的虚構の中で実現される「変身」であり、幕の向こうのことがらであることを知っているのだ。

祭礼にどう人々が、神を宿したシャーマンと共に「聖なるもの」と交流して自身をも新しくするのは異なり、劇場における観客は、どこまでも観る人であった。いかに「妙技神に入る」演技であろうとも、観客席を席捲するほどに舞台の広がりを感じられようと、所詮は幕が降りるまでのことであった。

歌舞伎の舞台において、「変身」の芸能化が進んだことによって、それは人々の観賞の対象と化したのである。「変身」は、依然として人々の強い願望であった。現実を超え、時間から逃れる当為として、人々に憧憬され続けている。それでいながら、己れらの肉体とはかわることのない画面の中の出来事、虚構の世界の当為として、束の間の感興の対象とされたのであった。

子どもたちの「ライダーごっこ」に端を発した夢想は、神々の時代をへめぐり、中世の能舞台を経て、歌舞伎における変身へとたどりついた。このあたりで、身近な子どもらの上に、再び視線を向け返してみたいと思う。

子どもたちは、視聴者という形でテレビの前に坐り「変身」のドラマと向かい合う。電波によって結ばれる像は、舞台上の俳優よりも遠く、実体のない対象である。手をいくら伸ばそうとも、演技者の肉体に触れることはできず、声をかけても彼らの耳に届きはしない。子どもらの前に出現するのは、完全に視聴者の参加を拒むかに見える隔絶された世界なのだ。そして、そこで成就される「変身」の奇蹟に、子どもらは目をこらして見入っている。

ドラマが終わり映像が消える。変身して、凶悪な怪獣たちと戦った憧れのヒーローも、一瞬の間にその姿を消してしまう。「変身」の実現したその世界は、電波の描き出した束の間の影、空しさの極まる虚なるものであったことをあらわにしつつ、視聴者の前から消え失せるのである。

しかし、子どもらは立ち上がる。躍動する彼らのエネルギーは、「変身」の実現を単なる画面の上の出来事にとどめず、現実

の當為とするために、己れの肉体に行動を命じるのである。

映像の世界は、子どもらの参加を許さない。したがって、古い時代に、祭礼につどうた人々が、自身の肉体に呪的行為を刻印することによって神々の訪れを早め、みずからも神と交わる者として変身し得たように、子どもらは己れの肉体にそのドラマを刻み込む機会を与えられてはいないはずである。にもかかわらず、彼らの類いまれな同化力は、みずからを単なる視聴者の位置におくことを肯じないのである。

子どもたちは、「変身」ドラマの中から、端的に、最も主要な部分だけをうつし取る。すなわち、「ヘンシン」という呪文と、あの独特の身振りである。時には、「変身ベルト」という呪具が加わることもある。そして、映像の消えたいま、この世界で、ためらいもなくそれら呪的言動を駆使して肉体化し、肉体化するこ

とによって現実のものとするのである。

彼らがこの現実の時空間において、「ヘンシン」の呪文を口にし、あの身振りをくり返すとき、そこには、「遊戲的現実」というもう一つの時空間が出現している。日常的な現実とは、そこから閉め出される。それゆえに、「変身」の奇蹟を目前にし得ない日常的現実とは、遊ぶ彼らにとって無縁のものとなり、子どもらの

呪術は成就するのである。彼らは、疑いもなく超能力者たり得るのだ。

こうして、時代の推移と共に、手の届かない舞台上の出来事と化した「変身」の奇蹟を、子どもたちだけはいまだに手中にすることができ。しかも、電波によって送られてくる「影」という虚の虚たる世界からさえも、それらを奪い取るのである。子どもたちが、映像の消えたテレビを醒めた目で眺めるのではなく、「変身ごっこ」に熱中し続ける間は、人類の希望は未だ失なわれない、というとしたら、それは余りにも大げさに響くだろうか。

ところで、「ヘンシン」という呪文や変身ベルトという呪具、それに衆人環視の中で現われる「変身の奇蹟」は、現代的に見えるこの遊びを、民俗の呪術的感覚へと回帰させる。二十世紀の申し子とされるテレビ文化の中から、子どもたちがつかみ出し、己れらのものとしたのが、極めて原初的な生のドラマであったとは、余りにも興味深く、また新たな夢想をくり広げてみたくなる次第である。

(お茶の水女子大学)

はじめ

村田修子

お茶の水幼稚園の庭には、ずっと以前から敷きつめられている小砂利が歩くと相変らず足の下でなっています。

はじめてここの先生になったとき、庭じゅう石が敷きつめてある、ということは、学校の運動場という概念からは考えられないことでしたから本当に驚きました。

それも今よりはもっともっと厚く敷かれていたので、子どもたちと一緒に走るとざくざくと砂利が崩れるので足が流されて、すこしもキックがききません。

運動は一つの態勢から次の態勢へと

移っていくその動きがリズムミカルで、

何の抵抗もなくスムーズに、そのリズムを崩さないで連続することによってよい運動、美しい運動、記録的にもすばらしい運動が行われるのです。ですから走っている途中で足がすべって、

十入れた力が六ぐらいの効果しか持たないのでは、運動するものにとって快いものではありません。走っている途中でその状態になりますと、思わない筋肉や腱に負担を感じます。子どもたちも鬼ごつこのときなど、もうすぐ友だちをつかまえられる状態のとき力が入ったために、うしろにキックした足

がすべってスピードが急に落ちてその機会を失っていることなどをよく見かけました。

どうして石なんかあるのだろう、といつもいつも思いました。けれどもときがたつにしたがつて、石の落着いた色に安定感を覚えるようになりまして。まして、雨のあとのきれいに洗われた石の色を本当に美しいと思いました。

石は丸くなっていますから思ったよりけがはないのですが、たまにころんと膝にきずができたときなどに改めて砂利が敷いてあることを思い出すようになりました。

そして更に、雨上りにも、また冬の霜どけの時期にも、晴れてさえいれば年中庭で日光に当たって遊べるので、先人のこの知恵に感服するようになって

て、そして砂利の敷いてあることが少しも不思議ではなくなりました。

砂利はだんだんに下に沈んでいくので以前ほどの厚さがなくなったせいもあるかもしれませんが、走るときの抵抗感についても、足を使うことの少なくなった現代ではかえってよい影響を与えているかもしれない、などと今では勝手に都合のよいように考えています。

このようにはじめは大変だと思ったり、感じていた事柄が、ときがたつにつれて余り感興を持たなくなってしまう、ということは世の中にはたくさんあると思います。ところが、このはじめに感じていたことが、何とも感じなくなるほど生活の中にしみ込んで、とけ込んでしまうことが幼児には必要だと思います。

この砂利庭にある砂場の道具入れの屋根の上に、黄色い柄のかねのスコップが毎日並べられています。ときには砂だらけのこともあります。大抵はきれいに洗われて干されているのです。これは五歳児の一学期のなかばごろに、かねのシャベルで砂を掘ったときのさくさくという感じを味わせたい、という気持ちから、「今度こういうシャベル出てますから大事にしましょうね」と五本出しました。その日の帰り前に誰いうとなく「これきれいに干しておこう」ということになって、それ以来そうすることが当然のこととしてずっと続いているのです。

こんな小さなことからしても、幼児の場合は一番はじめの印象がとても強いのです。ですから入園当初の指導が大切である、といわれるのです。この

時期は教師は大変に忙しくて心を休めるひまはありません。自由に動き回る子どもたちの特徴を、何かにことよせてつかまえて名前を覚えることと、つぎつぎとへやに入ってくる子どもたち一人一人に話しかけながら、水道のところに一緒に行って蛇口をひねって手を洗い、手ふきのかかつているところの名前を探しては手のふき方について話しながら手をふき、口に水を含んではガラガラとうがいをするなどの個人指導を何回も繰り返しながら、今をのがしては習慣づけをすることはできなくなる、と自分にいいかけながら、はじめの大切さと共に忙しくすごすのです。

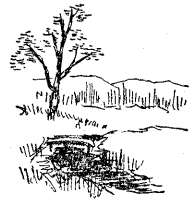
(お茶の水幼稚園)

韓国幼稚園教育の発達

韓国幼稚園教育の発達を、初期期・一九二〇年代より一九四五
年まで、独立後現在の三期にわけて考察してみることになります。

初期期

韓国々内に、幼稚園という名称をもった幼児教育機関がはじめ
て設立されたのは、一八九七年のことでした。しかし、これは日
本人子女だけのために立てられた幼稚園で、当時釜山府西町とい
うところに「朝鮮真言婦人会」によって「釜山幼稚園」が開園さ
れました。韓日合併条約（一九一〇年）締結以前のそのころ、す
でに相当数の日本人が韓国内に進出していました。一八九七年とい
えば明治三十年にあたり、日本国内では全国半数以上の都道府県
が、幼稚園設立に着手していた時期であります。ついで一九〇〇



李 相 琴

年には、仁川とソウルにも日本人子女のための公立幼稚園が新設
されました。

韓国人子女のための幼稚園は、一九〇九年現在の北韓にある羅
南に、仏教教壇によって立てられたものがありました。教師は
日本人でした。一九一三年京城府仁寺洞に、韓国人白寅基氏が創
立した京城幼稚園は、韓国人子女だけを受け入れ、ただちに一二
〇名の園児が入園したとのことです。まだ交通が不便であった当
時、園児たちは使用人につきそれぞれ人力車に乗って登園したとい
います。保育料も一ヵ月二円五〇銭という相当な高額だったの
で、園児の家庭は富裕階層であったことが推察されます。しかし
この京城幼稚園は、日本人教師が主導する立場で、韓国人教師と
一緒に保育にあたったのでした。そのころすでに日本人幼稚園が

数カ所開設されて幼児教育の必要性が認識されつつあったので、韓国内の進歩的で富裕な家庭では、韓国人子女のためにも幼稚園が設立されることを願っていたことと思います。

にもかかわらず、翌年の一九一四年に梨花学堂（梨花女子大学の前身）でアメリカのシンシナティ大学で幼児教育を専攻したブラウンリ（Blownlee 韓国名・富来雲）という宣教師と韓国人教師によってひらかれた梨花幼稚園には、わずか一六名の園児が入園しました。ということは、今こそ韓国にキリスト教が広く普及されていますが、当時はキリスト教宣教に対する抵抗感が強く、西洋人に対して非常に警戒的であり、一般に洋鬼とよび異端視していたことにも起因します。ブラウンリが主導した梨花幼稚園での幼児教育は、進歩的であり、児童の活動中心・生活中心の教育が実施されました。

一九一五年には、同梨花学堂に幼稚師範科という、幼稚園教師養成機関が設立されました。これは韓国最初の幼稚園教師教育機関であり、ここからの卒業生が、韓国幼稚園教育の発達に大きな影響を及ぼしたことはいうまでもありません。

ブラウンリはヒル（Patty Smith Hill）の著書 *Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade* を、韓国人教師と共訳して「活動に基づいた児童教育法」という名で出版し、幼稚師範科

の教科書に使用しました。また一方「遊戯唱歌集」「子供の樂園」等多くの編著を出し、韓国における進歩的幼児教育におおいに貢献しました。

韓国の幼稚園は、公立が無く私立だけです。そのうち、プロテスタント系四三・二％、カソリック系二四・六％（一九七二年現在）で、キリスト教幼稚園がほぼ七〇％をしめています。梨花幼稚園がキリスト教幼稚園として設立された最初の幼稚園であり、同時に幼稚園教師を養成したので、梨花の幼児教育が実践した進歩的教育は広く普及されることになりました。

このあと、大部分がキリスト教幼稚園ですが、伝統ある幼稚園がぞくぞく設立されることになりました。

一九二〇年代より一九四五年まで

一九一九年のいわゆる三・一独立万才運動のあと、日本政府は植民地強硬政策から緩和政策への転換を明らかにしました。幼稚園教育にも、一九二二年総督府令として、小学校令のなかに幼稚園規定が發布され、韓国幼児教育に対する関心を示したのです。

参考までに附記しますと、以前は初等教育も中等教育も年限・教育内容において日本のそれより一段と低めたものでしたが、この時期以後年限では日本国内とのバランスを考慮することになった

のです。が、教育内容ではなお約一年ほどのひらきをもったものでした。

当時公布された幼稚園規定内容は、一八九九年に日本で設定された、小学校令幼稚園教育及設備規定とほぼ同一なものであり、この法令は一九四五年戦争が終わり植民地解放になるまで、韓国の幼稚園を規定する唯一の法的根拠となりました。日本国内では、その後、小学校令の範囲内ではありましたが、法改正を重ね幼稚園教育の発達をはかったのに比べて、韓国では申しわけのたただ一度の公布で終わったのでした。

保育内容は前述幼稚園規定により遊戯・唱歌・談話・手技を扱いました。この点でも日本では後に観察科目を追加したのに、韓国ではなんらの変化も指示ありませんでした。

前にも述べましたように、韓国幼稚園教育の発達は私立にのみ依存してきました。それでも一九二〇年代になって、幼稚園がどんどん新設され、特にキリスト教幼稚園の数は著しく増加しました。

この一九二〇年代には、教師養成機関として、中央保育（現中央大学の前身）と、崇義保育（現崇義女子初級大学の前身）が開校され、一方京城保育（日本系）も開校し、まさに韓国幼稚園教育の発展期ともいえる時代でした。その後一九三〇年代後半期

まではずっと全国的に幼稚園は普及されたものでした。日本人幼稚園はおもに公立幼稚園が設立されましたが、韓国人幼稚園は私立であるので、保育料負担が重くなり一般家庭の子女が幼稚園教育を受けることは難しかったのです。ごく少数の韓国人が日本人幼稚園に行くこともありましたが、韓国幼稚園教育はその初創期から相当な水準以上の階層の子女を対象として発展していききました。

一九三八年ごろから総督府による干渉がきびしくなり、多くの幼稚園は閉園され、戦時中には託児所となり、終戦時まで幼稚園の減少が余儀なくされ、四カ校あった保育学校も閉校することになったのです。

独立後より現在

一九四五年の終戦を植民地時代の解放のようこびで迎えた韓国は、教育面の発展に驚くほどの進歩をとげました。たまたま一九五〇年の韓国動乱によって挫折され、いまだにその傷あとが残っていますが、教育の再建には政府も国民も非常な努力をしたものです。一〇〇に近い小学校の就学率はもちろん、中等教育は制度的には義務化されていないのにもかかわらず、高い進学率を表わしています。大学の多い国としても有名です。しかし、それにも

かわらず韓国の幼稚園教育は教育界の孤児といわれています。

量的にも大いに増加したとはいえませんが、人口増加率もそれほどやはり高くなっていますので、韓国で幼稚園教育をうける幼児はごく限られた数です。国家的な支援はもちろんどんな公的な配慮もうけられず、今なお私立の設立と運営に依存している現状です。

さいわいなことには最近世界的な幼児教育ブームののって、教育学者・心理学者・社会学者間で幼児教育の重要性と必要性を認めるようになり、いろいろな研究と事業がなされつつあります。

韓国教育界の焦点が、幼児教育にしばらくも遠くないのではないかと期待されています。

量的な面ではまだまだのところですが、韓国の幼稚園教育の質は、相当の水準に達しています。韓国最初の幼稚園教師教育機関である梨花女子大学校で、ブラウンリによっていち早く進歩的教育と児童尊重思想がとり入れられ、その後も海外の新しい理論や方法を広く吸収しつつ、質的な発展を続けてきました。

日本植民地時代も小学校以上の教育には非常にきびしい干渉があったにもかかわらず、幼稚園はずっとまじなほうだったのでした。したがって幼稚園では人間性尊重の精神が生存しうることができたし、また比較的のびのびしたふんいきを保つこともできました。

した。

現在も文教部令の幼稚園令によって、設置基準令とか教育課程令とかの規程はありますが、どの段階の学校教育よりも、自由な教育をしているところが幼稚園だといえます。現在の幼稚園令が規定した教育内容は、健康・社会・自然・言語・芸能の五領域ですが、各幼稚園はそれぞれの設立理念と、独自の教育目標を適用させて幼児教育にはげんでいます。

幼稚園教師は梨花女子大学校で一九五一年以来四年制正規課程で養成しており、中央大学校でも、四年制課程を終えた幼稚園教師を出しています。このほか日本の短大にあたる初級大学（二年制）と、専門学校（二年制）制度があります。

韓国では幼稚園教師は保母という名称でなく教師とよびます。保健社会部管理で設立運営される「子供の家」（日本の保育所に相当）の保育者は保母とよばれます。この「子供の家」については枚数に限りがあるので言及できませんが、最近著しく発展し、すでにその量において幼稚園数をりようがしています。

韓国の幼稚園の発達はその初期よりいろいろな問題をほらみ、遅々として、とてもにぶい発達曲線をたどっていますが、今後の発展に大きな期待をかけています。

（梨花女子大学校教授、現在聖和女子大学研究員として滞在中）

障害児と共に



佐 伯 幸 雄

出 会 い

出会いというものは予想や計算された線上で起こるというよりも、突然的であり、偶然的であり、強制的にでさえある。

ある家庭に先天的にしろ、後天的にしろ、障害児をもつというのは、必ずしも主体的に選びとったことではなかった。ある日、突然、一つの出来事（不幸）に出会ったことになったわけである。しかも、その事実を回避することが許されない、深刻な課題のしかかってくるわけだ。両親は途方に暮れる。病院や相談所にその救いを求めるが、即効薬のようなものは見当たらない。

最近、自閉児をはじめ、知恵おくれ、機能障害をもつ子どもたちの一般幼稚園、保育所への通園がすすめられるようになってきた。生きる権利という立場からも、発達心理学的にみても、普通児つまり、情緒の正常な発達をあげている子どもたちの中で生活させ、刺激を与えられることの意味が強調されてきている。

しかし、幼稚園や保育所には入園という関門があつて、入園児を主体的に選択できるようになっている。したがって、障害をもつ子どもは即世話のやける子ども、やっかいな子どもとして除外されてしまう。つまり、出会おうとしないわけだ。

私たちの園で障害児を受け入れていった場合にも、初めはこのことを自覚的に受けとめたのではなかった。偶然、H君との出会いがあつて、大変な子だなあ、とため息をついた思い出がある。

H君の探險期行動が間もなく始まった。彼は幼稚園中のスイッチはおろか、近所の家にまで入っていつてスイッチを押す。電灯がついたかどうかの反応を確かめて、次のスイッチへと行く。リコビーも輪転機もみな動き出した。とまどいながら、H君の後を追って消して歩いたが、一巡消し終わつたころ、また第二ラウンドになるという具合だった。

こんなことをくり返していて、どうなるのだろう。不安がつつてきた。相談所へ行って教えを乞うて、彼の行動を受容するこ

とを学んだ。大変なことだった。将来への不安、他の子どもへの影響など、悪い予感が次から次へと脳裏をかすめた。

しかし、私たちはこの子どもとの出会いを大切にしたい。親に同情するというより、この親と連帯しておつき合いたい。ここで園として主体的に受けとめていく決心をした。その決断は私たち教師としての生き方と無関係でありえなかった。

障害児と普通児

障害児と普通児の間には確かに差はある。しかし、その差は情緒的発達に未発達によるものであり、そして、その原因が身体障害によるもの、性格的に人一倍感受性の強さをもつためにひき起こされてきたもの、また、環境に彼の発育に不適応要因があったと想像されるものなどがあげられる。子どもの情緒発達および精神発達には順序だてがある。その順序だてがうまくいかなく、トラブルを起こしてきたものとして理解することもできる。

ということとは、もう一度、発達の順序だてを正しく認識し、一つ一つのプロセスを踏みながら、丹念につき合っていく必要がある、ということでもある。すると、障害児というわく組で特別視しなくてすむようになる。

とはいうものの幼稚園の中で生活させるとすると、さまざまな

問題に出会うことになる。

一、言語がないためにコミュニケーションがうまくいかない場合。

二、モノローグをいったり、まなざしが合わず、伝達がむずかしい。

三、自分の情緒のおもむくままに行動しようとするので、傍若無人な行動になって表われる。ガラスを割ったり、鉢植えの草花を抜きとったり、引出しをぶちあげたり、上靴、下靴の区別なく出入りしたり、水を床にまいたり、所かまわずおしっこをしたり、園外へとび出して街道へとび出る危険もある。

こんなことに出会うと、本当に困ってしまう。しかし、私たちは危険のないかぎり彼らの行動を受け入れていく。本人に禁止を求めるよりも、普通児との間にトラブルの起きないようにガードする。お弁当にもつてきたさくらんぼうをとられてしまうと、先生が用意しておいたさくらんぼうを取られた子どもにあげるの、そう、トラブルにならない。

やがて、数週間を経ると、だんだん、園の中にいることの不安が融けてくる。普通児の方からの働きかけも徐々に増えてくる。

保育の内容も変わってきた。ともすれば、先生の側のカリキュラムをティーチングしようとする傾向があるのだが、先生の心の

中に、エジュケト（引き出す）していこうとするセンスが芽生えてきた。子どものもっている欲求に対して、どのように適切に対応していくべきなのかを毎日のように職員会の議題にするようになってきた。何よりも一人一人の子どもが「わかる」ようにならなければならない。

そんなことを、障害児たちは私たちに教えてくれた。保育者としてはあたりまえのことであるのだが、やっぱり課題が先行してしまうことが多い。

私たちの園でも初めは障害のある子どもたちにとまどい、異常さを強く感じて、つい特別視してきた。しかし、今ではそれを子どもたち一人一人の中にある個性的行動やバリエーションともみられるようになってきた。

子どもたちの中にも障害児に対するこだわりがなくなってきた。はみ出た部分は認めてやったり、援助してやったり、相手の感情を察する力が育ってきた。一方障害児の方でも、抑圧感がなくなつて、おらかな園生活を楽しめるようになってきた。遊びの発展もでてきた。子どもらしいほほえみがその表情の中に出てきた。生きる喜びなのか、遊ぶ喜びなのか、喜びの表情が表出するようになってきた。いろいろな障害によって起こってきた情緒のこわばりがとれてきて、自分の中に情緒（うれしいとか悲しい

とかの感情）が豊かになってくると共に、相手の感情も徐々にわかるように育ってきた。

それでもハンディーは後遺症のように依然としてある。にもかかわらず、園全体は初期にあった異物感がなくなっている。

幼稚園での受け入れの条件

条件とは症状によって受け入れたり、断わったりすることをさすのではない。

しかし、そうはいっても、手離して障害児を受け入れられない。私たちは今日まで、物理的にも精神的にもいろいろな工夫をしてきた。たとえば塀を高くして乗り越えられないようにしながら、抑圧感のないように鉄柵塀にしたり、目に見えないところに鍵をつけて外部への脱出を防いだ。床は上下はきかえになっているが、自閉的傾向をもつ子どもには下ばきのままあがることも許している。掃除は大変だが、できるだけ清潔な環境を保つようにしている。床や壁にクレヨンで書かれることもある。後始末が大変だが、こうした行為がエスカレートするのではない、やがて終わって、他へ展開していき、やがて周囲との関係がわかってくと、いつしか普通児の中で目立たなくなっている。

一クラス三十名だが、その中に二―三名の障害児が混入されて

いる。入園期から一年ぐらゐは集団行動がとれず、はみ出しが多い。クラスから出ていった時にはフリーの先生が二名いるのでそこで受けとめ、遊びの相手をする。フリーの先生の役割りは、

一、危険防止のため、

二、クラスとの橋渡しのため、

三、個人的な遊びのつき合いをするため、としている。園全体が連繫プレーだから、放課後、データーを互いに交換し合う。

指導の要点としては、全体に自由なふん囲気を作ることにつとめている。子どもたちの自発性を優先させ、遊びからの発展を重んじようとしているので、障害児たちも興味のあるものには部分的ではあるが喜んで参加している。一学期の間は生活習慣のできなかった障害児たちが、二学期にもなると、必ず何人かの普通児が彼らを助けて、トイレ、上ばき、下ばきの着脱、お弁当の出し入れなどの援助をしながら生活習慣をつけていっている場面に出会う。

私たちは必要な援助はするが、できるかぎり、普通児の生活のリズムの中に包んでいこうとしている。教師は普通児に「何々してあげて」というような要求はするが、「何々してあげなさい」という指示はしないようにしている。

普通児の中で育つ障害児を見つめることによって、私たちの考

え方もずい分変えられてきた。何よりも、子どもたちの内的な欲求や感情の動きをとらえられるようになってきた。保育者として当然のことなのだが、その当然のことを、障害児たちが、新しく教えてくれた。

今後の課題

私たちは保育の仕事の可能性と限界を見いだしながら、保育への一つの道すじを建ててきたように思っている。育ちの順序だてがわかってきたことによって、途方に暮れることはなくなった。

しかし、日常的なこととして、困難な出来事に遭遇する。毎日が闘いだ、という感じさえする。家庭での子どもの取り扱いのために両親教育もおろそかにできない。教師の理解、労働条件、保育内容の充実など経営的にも、教育的にも問題は多い。しかし、その問題を回避しようとすれば、たちまちハンディーをもつ子どもを幼稚園の門から閉ざして疎外することにもなるだろう。

障害児と本当に連帯して生きるということは、この大変さを日常化していくことではないだろうか。育ちゆく子どもたちの目の輝きの中に大きな慰めを与えられる。

(杉並教会幼稚園)

幼児の遊びに関する 四つの断章



南 館 忠 智

1 前口上

前回の「公約」どおり、遊びの問題を取り上げることに決心しました。自信があつてのこと、では更々ありません。この一ヵ月間、どうしようか、どうしようかと迷いに迷つたあげく、エイまよよ、と決心した次第。この期に及んでいまだ成算など全くなし。カッコ悪いことおびただしい限りです。

この心細さの最大の原因は、近年加速度的にその度を増してきた筆者自身の「物事をハスに見る」傾向にあります。

それはたとえばこうです。手元に「幼児の遊び―この再検討すべきもの」と題された小論文があります。公刊されたのが一九六九年ですから、今から六年前。その筆者は、筆者自身。そこには、①「遊び」研究の現状、②「遊び」のとらえ方―行動・特質、③「遊び」の特質、④「遊び」の意義、⑤幼児の遊び―主導的活動、⑥幼児の遊びの現実性・空想性、⑦幼児の遊びの変容、⑧幼児の遊びにおける役割と規則、⑨幼児の遊びと教育、といった節が設けられていて、全体の調子はきわめてマジメ。一種の格調高きすら感じられる(?)のです。それは、六年後の現在の筆者にはとてもできない代物。読み直すだけで、いや、この代物のことを思い返すだけで、耳の奥がムズがゆくなるのを禁じえない

のです。

そこで展開されている論旨には、正面きつて反論しなければならぬ点はとくに見当たりません。それどころか、ほぼ全面的にゴモットモ。それなのにどうにもついて行けない感じがするのは、

これまた確か。いらだたしい気持ちの源泉はこの小論文の「自己完結性」にあり、その取り澄ましたツラの皮をなんとしてもヒンむいてやらなくては。それほどいきり立たずとも、と一方で思いつつも結果において意地を張っているわけで、これを盛んにケンかけているのが先ほどの「物事をハスに見る」傾向にほかなりません。やや冷静に言い換えるなら、一度この辺で「概念ください」をやり直そう、ということになるでしょうか。論旨の首尾一貫性なり自己完結性なりを追い求める努力を、一時ストップして、むしろ逆に、その一応の、一貫性・完結性にじっくり取り込まれない「異端的な」ケースを精力的に探し出してみたい、それがやがては理論の再構成化に役立つだろうという次第です。

それで今回は幼児の遊びをテーマに取り上げるとはいうものの、マトマッタ見解を理路整然と並べ立てて大向こうをうならせようなどというオオソレタ考えは毛頭ありません。そうではなしに、これまで筆者の頭の中ではほとんどマトモに扱ってもらえなかった、最近になってようやく少しはマシな扱いをうけ始めた、そ

んなポイントを四つほど、ほとんど脈絡なしに述べてみたいと思います。

2 子どもって？

数カ月前、一本のテレビ番組を作りました。幼児の好奇心をテーマに十五分もの、という事で制作担当者と話し合っているうちに、イタズラ心がふと頭をもたげたのでした。子どもを写す（撮影する）代わりに、子どもの目に映った世界を「絵」にしてみよう。これで十五分間テッテイテキに勝負する。「講師先生」の解説は抜き。ナレーションをなくし、バックミュージックも音をグンと絞る。子どもの目に映った（視覚的）世界だけが延々と映し出される。

このアイデアは、かなり薄められた上で、とにかくにも実施に移されることとなりました。この番組が二クルの続き物の中の一本だったという事情が、イタズラ心を（不十分ながら）満たしてくれる大きな理由になったようです。そうと決まってみると、サテ子どもの目に映った世界とはいったいどんな「世界」なのだろうか、まさに「それが問題だ」なのです。わたしたちは日ごろ気軽に、子どもの世界は独特だ、などと話しているのですが、それは具体的にはどのようなことなのでしょう。

時間的な制約もあって煮つめた議論などできぬまま「絵」作りが始まってしまいました。思いつくまま制作担当者に伝えたポイントは、まず、子どもの目の位置が低いこと、ということはわたしたち大人に比べて見上げる視線で対象物をとらえる割合が多いこと、次に、おんぶに抱っこに取っ組み合いと、視距離よりもっと近いところで対象物をとらえる場合が少なくないこと、したがってその対象物が視野の中に大きくおおいかぶさり、しかもピンボケに映るのではなからうか、さらにまた幼児の場合、大人ならほとんど気づかずに見すごしがちな対象を敏感にキャッチし、それに独自の方法でアプローチするであろうこと、ぐらいに過ぎませんでした。

この番組が放映された後、あれはオモシロかった、と何人かの方々からオホメの言葉をいただきました。一連のシリーズの中で、あの一本が風変わりな装いをもっていたのは事実で、そのかぎりにおいて確かに「孤立効果」は認められましょう。ただし、いい出した張本人としてはお世辞に酔いしれているわけには行きません。子どもの目に映った世界がはたしてアノようなものなのかどうか、まったく自信がないのです。そもそも「の目に映った」という表現自体が適切かどうか。これではどうも、子どもという存在をカメラか何かと同列にしているような感じ。子ども

のもつダイナミックで能動的な特性をいい表わすには、たとえば、子どもが「切り取った」映像的世界、などというイサマシイいまわしが必要。そうなるとなおのこと、子どもモドキをでっち上げただけではないのかと心配になるのです。

あの番組作りが生んだプラスの効果がもしあるとするなら、子どもたちは「デフォルメされた」世界に生活しているのかもしれない、とじっくり考え直すことの必要性を再確認させてくれた点に尽きると思います。デフォルメされた世界に住んでいるのは、あるいはわたしたち大人のほうかもしれないのです。さらにいうなら、自分たち大人と違う子どもという存在を理解することのむずかしさ、このことを浮きぼりしてくれたのだ、ということなのかもしれません。

3 固定遊具再見

ブランコに滑り台とくると、これは押しも押されぬ固定遊具の代表選手。ちょっとした遊び場なら、まずは例外なしにどこでもお目にかかれるオナジミの遊具です。ところがどうしたわけか不評なることはなほだしい。しかもこの不評の強さは、幼児教育の専門家を自認する程度に正比例しているように感じられます。いわく、決まり決まった遊び方しかできず、創造性を伸ばすのにチ

ットモ役立たない。いわく、場所ばかり取って、狭い園庭をますます狭くしてしまふ。いわく、怪我でもされたら大変だ、「きょうはおやすみ」のはり紙しとこう、等々。

これじゃ肩身も狭かろう、なんとか弁護を買って出よう、というのがヘソ曲がりのヘソ曲がりたる所以。そんなにまで悪口雑言を浴びせかけるのならサッサと取り払ったらよからうものを、などとブツブツいいながら「使用状況」を探ってみると、ウーンなるほど、これはお世辞にも大盛況とはいえそうもない。お子様方は皆さん創造的遊びに熱中しておいでなのかしら、と見渡しても必ずしもそんな気配なし。ヤレ一安心(?)と滑り台に目を戻してみると、やってるやってる。結構いろんな滑り方、それどころか使い方をしています。

お尻で滑り降りる基本型のほかに、あおむけに寝て、腹はいい姿勢で、また、縁から手を離れたまま、あるいは目をつむって、等々のバリエーションが続々と観察できます。同じ下降運動の中にも駆け降りるという方法もあり、これとは逆の駆け登りあり、はい上がりあり、ロープを使つてのロック・クライミングあり。こうなつてくると、いったい誰なんだ、「滑り」台などというケチな名前をつけたのは、といたくなくなる始末。一方的に決めつけた上、登っちゃいけない、と金切り声を上げることのアサハカ

サ。あるいはまた、彼らの止まるところを知らない進取的特性にただただ圧倒され、子どもは遊びの天才である、などとのたもつておられるオットリさ加減。

自分たち大人と違う子どもという存在を知り尽すことのむずかしさが、ここにはし無くも露呈した、というべきでしょう。それにしても、このことに気づいてか気づかずに、この遊具は社会性を伸ばします、これは運動能力を、こちらは創造性を、と「断定」できる人びとの自信と尊大さ。あいた口がふさがらない、などとアキレ返るのを返上して、こちらもガメツクそのリストに一項つけ加えてもらふことにします。

それは、「めくるめく経験」です。このタクラミがロジエ・カイヨワの説に刺激されていることは明らか。さすがカイヨワ先生、というべきでしょうが、一銭の得にもなりそうにない、当節流行の創造性ともほとんど無縁と思われるこの種の遊びをキチンと位置づけています。平常の秩序が崩され混乱されることによつて生じる「めくるめく経験」など、世間の荒波をたくましく乗り越えていくのに何の役にも立たん、といって切り捨ててはほしくないのです。長い一生、何がどう転ぶか、わたしたちは知り尽してはいけません。そしてこの「めくるめく経験」、どういうわけか固定遊具が得意とするところでもあるのです。

4 遊び場を？

大人の知ったかぶりとオセッカイの「結晶」が今日の児童遊園だ、といったら悪口が過ぎるでしょうか。「あそびません こわいくるまの とおるみち」というポスターをはりめぐらすのに懸命な大人に比べたら、子どもたちに遊び場を、と奔走する大人のほうがどれだけマトモなのか、これは明らか。このような努力に最大級の敬意を表するのにやぶさかではありません。それほどまでに今日の子どもたちは追いつめられているのです。なんとしてでも「子どもたちのスペース」を確保しなくては。今をのがしてはもう絶望的。

このような大人たちの「善意」が実を結んで、めでたく遊び場が誕生。よかった、バンザイ。手をとって、肩をたたきあってうれし涙にむせぶのは、どうしたわけか大人だけ。肝心の子どもたちは、初めのしばらくの間こそ物珍しさに寄ってくるものの、すぐ一人減り二人減り、やがてほとんど姿を見せなくなってしまう。来てるな、と胸トキメかせてよくよく見ると、それは親に「引率」された小さな子だけ。夕方になって自転車で乗りつけた大きなオニチャンたちが「ひと荒らし」する外は、閑古鳥が鳴くばかり。

こんなはずではなかったのに、と首をひねるのは一握りのマトモな大人だけ。その他大勢は落成式のあの日から無関心派に転向しており、「昔のエネルギー、今いずこ」。そして孤立感はやがて絶望感に変わり、最後に残るのが見るも無残な廃墟のみ。児童遊園変じて雑草園ならまだマシなうち、ひどいときにはゴミ捨て場、となり果ててしまします。ほんとにこれはどうしたわけでしょう。人びとの「善意」の中にヨワサが潜んでいたせいで、と筆者は思わずにいられません。

弱さの第一点は、「完成品」を珍重する考え方の中に認められます。まずガラクタを取り除き、次にマツ平らに整地して、それからあれやこれやの遊具を持ち込み、すえつけ、きれいにペンキを塗らたてて、ハイ出来上がり。ところ狭しと並べられた遊具の量もさることながら、そのどれもが完成品。子どもたちがみずからの必要感を掘り起こし、欲する遊び場のイメージを描きあい、少しずつの努力を着実に積み上げて行き、力をあわせ汗を流す中で創りあげていく。そのような余地がまったくなし。子どもたちはまったくの「お客様」で、ありがたく遊ばせていただくよう初めから強要されているのです。

盛者必衰。完成品は壊れるのみ。子どもたちが「自分」をぶっつければぶっつけるほど、その傷みも激しい。大人はこれを見越

して、できるだけ壊れないもの、ガンジヨウなもの求めまわる。それが子どもにとっては変化のなき、単調さと映り、またまた魅力^{魅力}を失ってしまう。つまるところ大人には「不変性」への信仰があり、子どもの望みと相いれないこの信仰は「安全重視」によって支えられています。安全重視といえは至極モットモなのですが、現実には安全「過」重視ともいえるべき状態。この第二の問題点は、首尾一貫、徹底しているならそれなりにゴリッパともいえるのに、遊具が故障しても知らん顔といった「気まぐれ」が随所に見られ、ドウシヨウモナイ現状にあります。

5 大人って？

先日、ある連続講演会で「競演」することになった友人のひとりが楽屋うらでツブヤいたのでした。子どもの遊び、子どもの遊び、の大声を出さずに済むときは来ないものだろうか、と。ふともらしたこのことはの陰で、思慮深い彼が何をどこまで「いめぐら」していたのか、精確には知る由もありません。ただそれは、筆者が筆者なりに何事かを感じ、何事かを思うキッカケとなるのに十分なツブヤキではありました。

筆者の中でいまだハッキリした形をとるに至っていない「モヤモヤ」に、性急かつ強引にレッテルをはるなら、大人とは何か、

ともなるでしょうか。正直なところ、どんなレッテルであれ、それをはるという行為自体によって、モヤモヤが不当に矮小^{ちやう}化され変質してしまう恐れをどこかで感じ、ためらっていたのです。が、今回の小論をしめくくるにあたってあえてやってみた次第です。

大人とは何か。やはりどうも正面きつては扱いにくい。となるとレッテルのはり方がマズかったのかな。一つ、経験談から始めましょう。昨春秋、園児をもつお母さん方にたずねてみたのです。この秋、ドングリを拾われましたか、と。半分以上、三分の二ほど、拾ったとの答え。では、お子さんが側にいない（つまり自分だけ、あるいは大人どうしの）場面で拾われた方は、とつづけると、今度は挙手がほんのチラホラ。別の機会に同じことをもう一度試みたのですが、結果はおどろくほどよく似ていました。

さてさて、大人とはどのような存在なのでしょう。子どもと一緒になら拾い上げるドングリに、自分たちだけなら見向きもしない。人間だれしも自分をとりまく周囲の条件に応じて、ふるまい方を変えるもの。とはいうものの、手のひらを返したようなこの違い、陰日向がひどいといわれて抗弁できるでしょうか。子どものタメを思えばこそ、忙しい生活の合い間をぬって、自然に親しむチャンスを作ってやったのだ、などと本気で主張しきれぬでし

ようか。いや、本気でそのように思いこんでおられる向きが意外に多いのかもしれない。どうもそんな気がします。

それはすなわち、自分は子どもと別ものだ、という「秘められた信念」とでも呼ぶべきものです。自分は子どもと同じでない。

ここまではまぎれもなくその通り。問題はその先、違いをどのようなものにとらえるか、まさにこの点にあります。ここでのポイントは、それを非連続な本質においてとらえるか、それとも連続的な本質とともにとらえるか、の選択にかかっているといえそうです。端的にいえば、子どもの遊びを考えると、自分たち大人の遊びをどれだけ意識し、どのように位置づけているか、そして更にはどのように実践しているか、ということですが、それとこれとは異質のもの、と決めつける進歩的遊び論はこの辺で根本から洗い直しが必要なのではなからうか、とオボログながら思うのです。

(三重大学)

五月のうた

どういうわけか一番最初に頭に浮かぶのは小学校唱歌の「鯉のぼり」、

「いいらあーあのなあみいと」

と歌いながら、何の意味がちっともわからなかったし、二番の

「たちばあーなかおーる」

というのは宝塚のスターの名前かと思ったりした小学生の私だった。

でも、成長して幼稚園の先生という、あこがれの職業については、五月になると、やはり幼稚園唱歌の「こいのぼり」や「せいくらべ」の歌を子どもたちと一緒に歌った。

そしていつのまにか結婚して、子どもが小学校に入学して、PTAのコーラス部というのに入って、五月の歌として教えていただいた歌は「おお、牧場はみどり」だった。

青春時代を戦争、戦争の中にすごした私にとって、ふたたび青春をとり戻したかのような、さわやかな歌に思えて、声をはり上げて歌ったことも今はなつかしい、

(赤間峰子)

幼児との教育について思うこと

—その二—

河 辺 杲

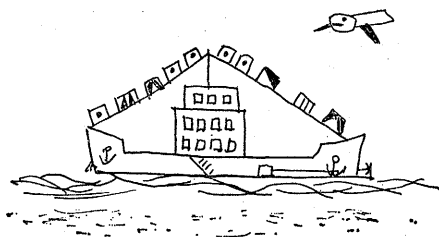


登校拒否の子どもとともに

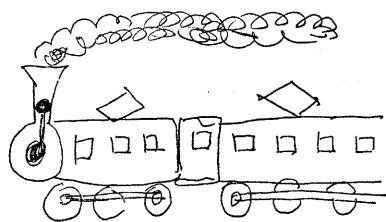
三つ目にお話したいことは、私がちょうど教育相談をやっておりましてぶつかっている問題の中で最近非常に増えてきている登校拒否児の問題があります。学校恐怖症といいますが、そういう神経症的な子どもがたいへん増えてきているわけですが、最近次のような子どもに出会いました。ちょうど二ヵ月ほど学校を休んでおりました小学校二年生の子どもなんですけれども、母親はもう四苦八苦して、一度お稲荷さんに見てもらわなきゃいけないというんでお稲荷さんの所へ走って行ったり、少し八卦をやられる人の所へ行ったりされると、あなたのおばあさんのおとむらいができていないから、なんていうことをいわれて、まあお母さんの最初のインテイクの時の話を総合しますと約二十万円ぐらいの金を使ったといわれるんですね。もうあなたの所が最後の頼みでこ

こへ来てだめだったら私も精神病院へ行かなきゃいけない、なんてな非常に大げさなことをおっしゃっていたのです。

子どもは第一回目に来ました時に、本当にお母さんのうしろにしがみつくようにして泣いてばかりおりました。ちょうど私の所へ来る前にある児童相談機関へ行ったようなんですけれども、その児童相談機関でもそのような状態で、まあインテイクが過度に調査的になったみたいで、子どもが退屈してしまったり、たいへんそのふん囲氣に何か恐怖感を抱いて、どうももうその児童相談機関に行くのはいやだっていいまして、私の方へ回ってきたわけです。それまでに精神病院へ連れて行って精神科のお医者さんに見ていただいたり、薬ももらっていたようですけれども「僕の病気はそのような薬を飲んで治る病気じゃない」って、子どもは、もうちゃんと自分のことがわかってるのかのようなことをいっていたようです。第一回目に来た時はお母さんから離れませ



①



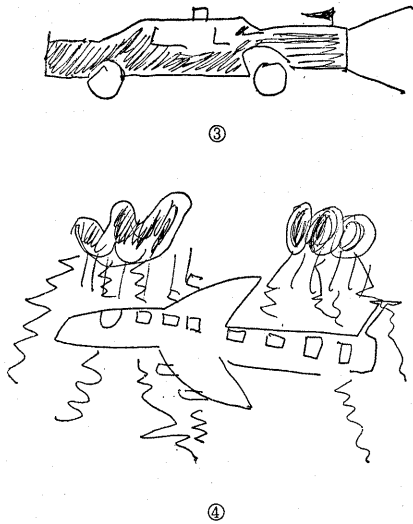
②

し、プレイをしようと思ってもプレイできないままに、お母さんのお話を聞くだけで四十五分ほど面接をして帰ってもらいました。その次の週に来ました時にも、お母さんのそばを離れなかったんですけれども、プレイルームで話合っておりますから、おもちゃがたくさんうしろにあるのが気になるらしく、そのおもちゃの方にちらちらと目をやっております。それで、お母さんの話の途中に「僕、もしうしろのおもちゃで遊びたいのなら遊んでもいいよ」っていいますと、つかつかとその遊具の所へ行つてそのおもちゃをなぶりはじめました。でも、すぐもどつてきました。そのうちにちょうどお母さんと話しているすぐそばに机があつ

て、そこに画用紙が用意してあつたんですが、その画用紙に絵を描くと言ひ出しまして、絵を描きました。最初の絵は艦装つて言ひましょうか、旗が立ってまして船が今にも何か、こうきれいに飾つてあつて、これからどこかへ船出でもしていくのかなといううような感じのする絵を一枚描いてくれました。お母さんに聞きますと、こんな絵を描いたのは初めてだそうです。大が、西部劇のような絵を描くのが得意なんだそうです。私はその船を見た時に、いわゆる船出のテーマといいますか、いわゆる出て行きたいという気持ちは何かあるんだなあ、ということを感じました。その日はこの絵を描いただけで帰っていったんですけれども、しかしよくよく見ますと、大が、こう煙突が出て煙がもくもくと出るんですけれども、この子どもには煙突がない。もちろん煙も出ていない。まあ最近の原子力船であれば煙突はないかもわかりませんけれども、何かこう艦装してそして船出しようという、そういう心構えはあるらしいけれども、エンジンはなかなかかかってきていない、というように二回目の時に感じました。それから三回目の時には三枚描いたのですが、一枚目の絵が、いわゆる機関車の絵②でした。今はこんな汽車走っていません。電気の機関車じゃないんですけれども、昔の汽車を描いてくれました。そして盛んに煙が出ているわけです。ところがレールを描

いていない。何かこうエンジンはあるんですけれども、エンジンは前の船から比べるとかかつてはきているんですけれども、どうももう一つ走る所がない。無軌道車みたいになってるんですね。それから、二枚目のはいわゆる普通の乗用車③、これは紫と黄色で描いていまして、あまり感じられるものがなかったんですけれども強いて色の上でいえば、よくいわれる紫であれば寂しがりやだとか、黄色で言えば甘えん坊であるとかいうようなこともそこから感じられないこともないんですけれども。

その次に描いてくれたのはねずみ色で、いわゆるダグラス型の飛行機④を描いてくれました。そして雲がこう出てまいりまし



て、で、もうこれで終りなのかな、と思ったら、雨が降ってまいりまして、そしてさらに雷光がしてきたんです。この辺になってきて私は黙っていらなくなつて「大丈夫かな。この飛行機、雷光がピカピカとして、雷が落ちて、燃えて落ちやしないかな」っていったら大丈夫だつていいました。まあ、この船といい、飛行機といい、その他に、鳥はまあ描いていませんけれど、鳥だとかいうようなものはいわゆる飛び立つ、といいますか、そういう意味のことを私はよく感じるんですけれども、しかも、そういう危険に満ちた中でもあえて大丈夫だということをいっているところに、何かこの子どもの内面に少し、こう元気を取り戻してきたような感じがしたんです。

で、それでその時は終わつたんですけれども、その次の四回目の時に来て描いてくれましたのは、まん中に小さな木がありましてそこに人が一人いるんです。これは何だつていったら「保安官だ」っていうんです。もう一人の方はインディアンだつていうんです。そして向こうにあるのはサボテンなんです。それからこういう線が描かれまして、今ピストルでうったら、こちらにいるインディアンが倒れたんだつていうわけです。ところがその倒れたインディアンが描けていないもんですから、「もう一枚画用紙をつないであげようか」と。そして「つないであげたら描くか」

ってきいたら「描く」っていうわけで描いてくれました。この辺から赤い色で血がたらたらと出てここんとここにあたっているんですね。で、またこっち側がこういうふうになっているのを描きました。「これは何だ」っていったら「インディアンが自分がやられる前にうった弾丸がはしごに当たってはしごがこわれたんだ」っていうんです。はあっと思いました。今度は前よりもっと大きなサボテンのようなものを描きましたので、「サボテンかな」っていったら、「さわったら爆発するサボテンだ」っていうんです。

つづいてこんどは、ここに大きな人物を描きまして「これは何



か」っていったら、「保安官で助けに来たんだ」っていうわけですね。そして二匹の馬が描かれまして、「これは何だ」っていったら「一匹はこの保安官が乗るんだし、一匹は助けた保安官を乗せて帰る馬だってこういうんですね。つぎにこちらにも馬を描きまして、らくだのような馬でしたけれども」「これは何だ」っていったら「もう探しても保安官がみつからないでこのインディアンがこれに乗って帰るんだ」ってこういうてくれたんです。「ああ、よかったねえ」ってこちらはひとりでにそういう言葉が出てしまったんですね。

「それじゃもうこのたすけに来てくれた保安官にすぐこのはしごをなおしてもらって降りてこられるね」っていったら、「もう直してもらわなくてもここから飛び降りられる」っていうんです。その時に、私はこのように、いろいろかわりながら、本当にまわりが危険に満ち満ちていて目に見えない恐怖感をもっているんだなあと感じました。サボテンの木といい、インディアンといい、そして保安官を探そうとしている。きつとこの、ここにいるのがこの本人ではないのかなあってその時感じました。そこでもうほとんど時間がきてしまったので、それで本人が描き終わった時に、こういうことはあまりいふもしないのですが、私はフォローアップのつもりで、「もしこういう劇をするんだったら、僕はど

れがやりたい？」っていったら、「これだ」と木の中の小さな保安官を指さしました。

この小さな保安官がやりたい、ということとはまさに自分のその時の気持ちでこれだったんだろうと思うんです。さらに蛇足でしたけれども、お母さんはいったいどれなんだろうと思ったものから「ほくのお母さんはどれをやるだろう」ときくと、「この大きい保安官だ」というんです。これも蛇足だったんですけれども私の位置がちょっとは違ったものですから「このおじさんはどれだって言ったら、「これだ」とまた大きな保安官を指さしてくれました。もうすでにお母さんも私も、そこには何ら介入する必要なしに自分で飛び降りられるような状態になっていたみたいですけれども、それまでというのは、このプロセスをたどって行きますと、危険に満ち満ちた中に自分がいるっていう、周囲が本当に危険に見えていたんだろうと思うんです。

こういうようなプレイセラピー（遊戯治療）の中で、私たちはよく絵を見たり、遊びを見ながら、その中で起こってきている子どもの、何と云いますか、心の原型と云いましょうか、人間の根元的な世界というような言葉でも言えると思います。けれども、そういうものができるだけ把握したい、理解したい、という気持ちでいつも接しているんですけれども、何かそういうふうに私は

もつともつとこういうふうな接し方をしながら子どもの根元的な世界にせまっていくなことが保育の中でも必要ではないかと思えます。できるだけ本当の子どもの内面に近い所で理解しようということは、教育の新しいこれからの内容として私はとても大事なことじゃないかな、そしてそういうことが、何かわからなくても、本当は最後の所はわからなくても、何かそのわからうとする努力が、努力していることが相手に伝わっていく、その中で子ども自身が成長への衝動のようなものをとりもどしていき、よりよい成長をしていくといいますが、安心感を得て成長していくと申しましょうか、そういうことを感じました。

でも私はここでふと思ったんですが、今までの自分であれば、ふんふんといってありのままを聞いて、見ていただけの、そういう姿が自分の受容的な態度であるかのように自分では思っていたけれども、最近の自分はそうじゃなくてももう少し積極的にかかわって行って、そしてそのかわりの中でも自分が感じるものの、私自身が何か感じてくるもの、そういうものをできるだけ自分自身が見つめようとしているわけなんです。そういうことが本当の受容的態度ではないんじゃないか、というふうに自分で最近思ってきております。受容的な態度といいますが、あるいは共感する態度でなことは非常に教育の中でも、あるいは皆さんが現職

教育の中でも、しばしば問題にされているのではないかとは思ってけれども、もっとじっくり見つめる、眺める、いわゆるある距離をおいて眺めるといふことも大事なことで、同時にまた、いわゆるもつとかかわりながら相手との対決の中で自分の中に起こってくるものを自分がわかっていくことが、本当に何か大事なことにように思います。そのことによって、子どもがこれに呼応するかのようによりよい成長していく。ちょうどこの子の最後の絵をみながら私はその時、何かそういう予感がしていたんです。すると次の約束の日の朝電話がかかりまして「今日から学校へ行くようになりました」と、「でお礼に行きたいんだけれども、やれやれというので病気になってしまつて寝込んでしまいましたので、御礼にもいけません」とお母さんがいわれました。ちょうど四週間、週に一回ずつ通つて、この子どもは二ヵ月の登校拒否をおさらばして学校に元氣よく行くようになったわけですね。その後本当に元氣よく通つているそうです。

子どもとのかかわり方を再び考える

私が、何かこういうことを申しあげますと、特殊な勉強をしないといけないかのように感じられたかも知りませんけれども、専門的な勉強もするにこしたことはありませんが、もっとこう人

間に密着したところで、私は何か保育つていうものを考えていきたいなあつていうことを最近しみじみと感じておる一人なんです。

これは少し角度が違ふんですが、最近これも今年卒業されてきたばかりの先生が話されていたんですが、子どもたちと山登りをして遊んでいて、本当にもう夢中になつて遊んでいて、幼児をかきのけるように上がつていた。その自分を後で振り返つて、ちょっとこれは子どもに近づきすぎたのではないか（？）子どもの世界にもっとせまらなきやいけないつていうんだけれど、これは入り過ぎたんじゃないかなと。たいへんよく子どもと一緒に遊べたという気持ちと共に、そういう反省を持つたということを、保育が終つたあとで職員室で話していたら、先輩の先生から「子どもと一緒に遊ぶのはいいが、あまり入り込んでしまうとあらあかんえ」「あまり入り込んでしまうと、子どもが見られないんだ」という指導助言をいただいたという話を話していました。私はその話を聞きながら、まさに先輩の先生らしいことをいわれたなあという感じがその時してきたんですが、私も過去だったらそういうことをいつたかも知らないし、まだ心の片すみにはそんな気持ちがあそこにあるかも知らないんですけれども、私は最近もつと子どもと対等になれる、いわゆる、かきのけてでも上がつて

いった、先輩の先生からすれば少し入り込みすぎて、なにか先生というものを見失ってしまっているんじゃないかなと思われるぐらい、こう入っていかれた先生を、私はすばらしいなあ、と思うようになってきました。そこまで入れるということが保育の中ではとても大事なんじゃないかなあ、で、そのあまり入り込むと子どもが見られないということはいったいどうしたことなんでしょうというのをまた考え始めておりまして、私は先ほどもいいましたように、本当に人間に密着した所で、自分の中で何が起こっているかということが感じられていけばいいと私は思うんです。自分自身が感じられないで、いわゆる子どもが果たして見られるだろうか、ということもその時に、反応的に思いました。もっとも自分自身に素直になるということがどれほど大事なことになるか、何か本当に入り込めないでいて、いわゆる中途半端な所につきも自分を置いておいて果たして本当に子どもの成長のためになるんだろうか、ということをもう一度考え直してみたいな、とその時思ったんです。

なぜそういうことを私最近思うかと申しますと、これも数年前からですけれども、何人かのグループでもって、いわゆるエンカウンターグループというものをもちまして、どういような状態の時に本当に人間関係がスムーズにいくのかということ、自分

に非常に関心を持って私の一つの課題にしているんですけども、そういうことをやっている時に、そのグループでは指導者とか世話人とかそういう言葉を使わないで、いわゆるそのリーダー的な役割を持つものをファシリテーター、ファシリテイトしているという言葉でいっているんですが、いわゆるそのファシリテイトというのは促進、これは訳してしまうともう日本語になってしまつて本当のファシリテイトしていく意味というものがつかめなくなるかもわかりませんし、ああ促進か、というふうになってしまふんです。けれども、本当はファシリテイトはファシリテイトとしてもっと追究していかなきやいけないだろうと思います。この中で本当にグループの人間関係がスムーズに促進されていく時には、そのいわゆる促進者になつてゐる者がどこまで、同じような所まで降りられるかという、たとえば超然としたような姿勢でいたり、紳士ぶつたりしているようなファシリテイトの仕方では、なかなかそのグループの深い関係が促進されていかないということ、最近私は自分自身体験して理解しているわけです。

でもっともこの研究が進んでいけば、おそらく教育そのもののもっと変えられなきやならないんじゃないかな、という仮説も私の中にあるんです。しかし、そういう経験の中で、「指導とは」ということをもう一度考え直してみると、本当に対等になれ

る、本当にこう自分がすべてをさらけ出せる。もっとちがったことばでいえば、よく昔から「目の鱗うろこが取れる」というような言葉がありますけれども、そういうような本当に目の鱗うろこがとれるような、そういう先生になる、また取れるように努力していく、そういうことがやはり教育の中で本当に考えなきゃいけない大事なことじゃないかなということ、その新任の先生の話や先輩の先生の話から（本当にそうであったかは、その先生から伝え聞いたもので、どこでどういうふうにくい違ってきているかわかりませんが）、指導とはということについてひとつ考えてみたいな思ってたわけです。

教師もイメージを

それから、この前の時もちょっとかたづけのことをいったら、現職研究会でもかたづけの問題が出てきていたようですね。その時皆さんが話し合いになったことと同じこともわかりませんが、私はその場にいませんし、その話を聞いてないものですからわからないんですけども、最近ある幼稚園で、粘土遊びをやった、デコラの張つてある机、一メートル四方の机のまん中に、どんと、そこでは粘土を山盛り置いてそれにかけてにとつて遊ぶことをやっているわけですけれども、遊びがもう終りごろになります

と本当にデコラの所にこびりつくようになって、なかなかかたづけがたいへんなんです。その時たまに先生が、爪でもって押すようにでもしなければなかなか取れないので、それをやりながらふつと先生の頭の中にイメージがわいたんですね。どういうイメージかと申しますと、ブルドーザーっていうイメージが出てきたというわけです。

「ガー」とこいいながら、「ブルドーザーだよ」といいながらその粘土をつめと指で集めるようにされたら、四歳の子どもがわれもわれもと、特に男の子が「ブルドーザー、ブルドーザー」といって粘土を中心に固めていったんです。固まってきたものを、ポリバケツの近くにいた子どもに先生が「誰々ちゃんこれちょっとそこへお願いするわよ」というと、皆が集められてまともだと「お願いするわよ」と先生と同じ言葉でいい、いわれた子はそのバケツの中に放り込む。バケツのそばにいた子どもはいつのまにか入れ役をさせられてしまっていたということです。

これはまた別の日なんですけれども、ブロック積木がよく組み合わさったまましまわれています。なかなか一つずつ取っているみたいへんなものですから、「ちょっと向こう持ってちょうだい」といって引っぱり合いをして、どっちが強いかなっていいながらみんなですべてのうちに、みんなブロックがもとどおりにな

っていったということです。これはもう前から皆さんが考えていらっしやることだと思んですが、しつけというような言葉でよばれているものと、いわゆる遊びという言葉でよばれている幼児の生活とが、何かどこかで統合されていかなきゃいけないのではないかと思います。遊びの形でしつけをするんじゃないということとを私はその時また感じました。いわゆる教材といいますが、経験させるべき内容と遊びとがもっと統合されるということが、私は保育の中になければならないんじゃないかな、そのことの方がもっと私はスムーズに子どもの中に位置づいていく。何かそれがばらばらのままであまり遊ばしてばかりいてはいけない、遊びは遊び、仕事は仕事とやっているためやったりやらなかったりというようなことになってくるんじゃないだろうか。

ただ粘土をやるといつでもブルドーザーという、概念ができてしまうかも知りませんし、もっとそこで違ったイメージが子どもの方から逆に出てくるかも知りません。何かそういう今までしつけという言葉で考えられてたものと、遊離してしまっているのではないか、そこをもう少し統合するような、そういう活動つまり子どものものになった真の遊びといえますか、そういうものを私たちが真剣に考えとりくむことが必要じゃないか。そのために大事なことは教師自身の中に教師自身がイメージを持った時に

そのイメージを子どもにぶつけていくという、そういう姿勢があれば、今言ったようなことが案外できるんじゃないだろうかと思えます。子どもはどんなイメージをぶつけてますけれども、その逆に教師自身が教師自身の持ったイメージというものはあまりこう、出ししづっているんじゃないか、もっと教師のイメージを率直に子どもの前に披露していくことが、あるいは子どものイメージと教師のイメージをぶつけあっていく。ある時には教師が出してもそれに共感してくれないかも知りませんし、ブルドーザーっていった時に本当にブルドーザーみたいだって共感してくれた時に、そのことがまさに行われている。だからそれは出してみなければ本当にはわからないし、もっとどんな教師のイメージというものを出していく必要があるんじゃないかっていうことをその時思いました。

幼児の世界のすばらしさをみつけよう

いろいろな勝手なことを申しましたが最後に、私はこれからもう少しこんなことをやってみたいなと思うのは、幼児の世界っていうのはすばらしいなあっていうことを、皆さんは恐らくおひとりおひとりがどこかで何かを感じてらっしゃると思うんですけれども、そういう幼児の世界のすばらしさといいますと、何か幼児

の世界に溺れこんでしまつてはいけなんという批判もあるかもしれません。しかし、いくら考えても、何か教育することによつて人間をこう悪くしていつているような感じが私の中には最近起こつてしょうがないんです。もともと、幼児の世界のすばらしさについていますかそういうものは、おそらく人間の世界のすばらしさだろうと思うんですけれども、それに気付いていくということ、あるいは今まで気付かれているものをもっと集大成していつて、みんながそれに共感していくことができたなら、もっと保育は変わっていくんじゃないかということを最近つくづくと感じています。そしてそんなことをやってみたいなと思うんです。つい最近もある幼稚園で小鳥が死んで、その小鳥のお墓を作った時に、じかに入れると冷たいだろうから葉っぱでもつてくるんで、埋めたんです。そうしたら半時間もたたないうちにまた四歳の子どもがいつの間にか手のひらの中にその小鳥をかかえているんですね。先生がどうしたのって言ったら、

「この小鳥はね、やっぱりこの中がいいの」

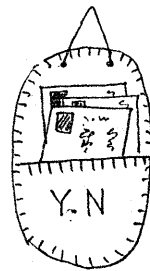
その子どものたなごころの中に死んだ小鳥をじっくり抱いていることに、小鳥の安心さといいますが、そういうものをその子どもは見つけたのではないかと思えます。それから、ある幼稚園では死んだエビガニのお墓に毎日々々水をやっている子どもや、そ

れから、死んだお魚を川へ流してやる、きつと川にはお父さん、お母さんでいるんだからつていうようなことをいった子どももいました。死んだ小鳥をお墓にうめて、その上に高い木を植えてやる、きつとその上でこれからも遊ぶだろうつていうようなことを考えた子どももいましたし、つい最近ですけれど、まる虫が死んで土の中に埋めたら、またまる虫つてたくさん生まれてくるねつていった子どももいました。何か死というものと、いわゆる生まれ変わつてくる、再生と言いましようか、そういうものが同時に子ども心の中では感じられていたみたいですね。

死んでしまうと、人間は何か早く忘れてしまつてような現代人になりつつありますけれども、何か子どもはもっと暖かい世界に住んでいるみたいです。子どもの世界のすばらしさつていうものを、皆さんは恐らくもつともつとたくさんいろいろなところで感じていらつしゃるんじゃないかと思えますし、これからまた聞かせていただきたいと思えます。

(大津市立教育研究所)

こすもす保育園見学日誌



竹田都志子

5月28日

私は、保專の新米教師である。付設保育園がないので、乳幼児心理学などと、ふりかぶって教えてはいるが、子どもたちの年齢、月齢すらはつきり当てられない。

これはいけないと思って、おそるおそる、ある保育園の門をくぐった。あき時間を利用して見学させてもらおうと思ったのである。

……そこには、こすもす保育園と、ひらがなで書かれた白い標札がかけてあった、コスモスでなく、こすもす、とひらがなというの、何か柔らかい、ふんわりした感触を私に与えてくれた。

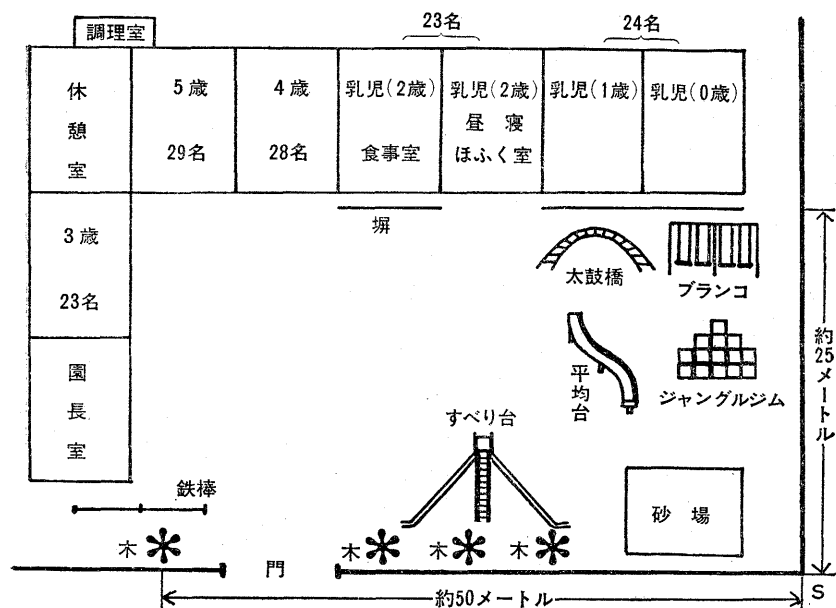
「あのー、すみません、Tさんに紹介されてM主任さんに会いに来た者ですがあ」

「この奥の部屋ですよ」

会えた、会えた。主任さんは、ジーパンスタイルも活発な30代の方であった。

……「このごろは、保專の卒業生は、私立へは来てくれない。また、乳児保育を長時間やっていて、これでいいのかなあと疑問を感じますよ」等々、口角泡をとばすというか、元気に、気さくに、ボンボンボンボン、日ごろたまっていた疑問を、機関銃のように話してくださった。そして保專の教師だが、なまの子どもたちを知りたいので、見学させていただきたいという旨を伝えて最初の日は帰った。

園舎は長方形の広い園庭に「の」字型に建った平屋の木造の建物であった。



6月4日

見学できるようになるかなと心配しながら、門をくぐった。

「今日は、主任さん市役所へ寄ってくるので遅くなりますよ。」

見学の方ですね。どうぞこちらで待っててください」明るい保育
さんに接して少し不安が消える。

でも、やがて主任さんがみえ、更に園長と対して聞くことにな
った返事は、ちよびりだけど厳しいものであった。私の仕事が
保専の教師ということで、自分の保育を見られるのがいやという
保母さんと、見られてもいいという保母さんがいて、全体をうま
くまとめた園長としては、

① 自由遊びの間だけ

② 子どもに自分から話しかけない。話しかけられた時は応じ
てもよい。

というものであった。私は承諾した、いや見学させてもらうこ
ちらが承諾したというのは変かもしれない。

園長は優しいような、色白の中年のちょっと太った女の人で、主
任さんは今日も気さくに話しておられた。要するにいやだという
人がいることを尊重したいということなのだが、それはそうだと
思った。私がいくら力不足でも職名を聞けば、自分の保育を見ら
れるようで保母さんはいやだろうなと思って黙って帰った。

6月11日 雨

登園風景より

母A「ほら、くつ、ここよ。XXちゃん、ここよ。ほら、傘、ここよ。XXちゃん、ここよ」と入れてあげて叫んでる母。子は母の声に、あまり見向きももしないで、保育室にごく普通の速さで入っていく。

母B 子どもが整理し終わるのを見守っている。終わったところで、「じゃあね」と言って帰る。子はもう保育室に入るのが夢中で母に挨拶もしない。

母C「XXちゃん、ここよ」と傘を入れてやる。子どもは見えない。くつは子どもが自分でしまつて保育室へかけこむ。

たった数分間の雨の日の玄関先なのに、おもしろい光景に出会うものだと思った。母親の養育態度の違いと子どもの保育室への反応の違いがおもしろかった。

6月18日 晴

ブランコ

元気そうなA男。ブランコにのって、もう一方の(横の)ブランコも手に持ってゆすっている。誰ものせないためか、それとも、変わったのり方がおもしろいためか。隣の二つのブランコ

でも、やはり同じように、もう一方を手を持ってゆすり始めた。

やがて女の子が来て、男の子が手に持っていた方のブランコを受けとり、仰向けにぶら下がって、くるくるくるとブランコをまいてはほどく遊びを始めた。横では男の子が前後にゆすっている。

私は危いなあと思つたけれど、保母さんたちが何も言わないのだからと黙っていた。やがて二人のブランコ遊びは終わる。ケガも何もない。ぶつかってコブができるくらいのことを認めて遊ばせない、のびのびしないのかもしれないと思つた。

6月25日 晴

視診

連れてきた子どもについて、母親が保母さんと話をしている。いつかの雨の日はそんなことはないようであつたが、今日は何人も、保母と話している。雨の日は早く来た子どもの世話に忙しかつたのかもしれない。

遊具の使いこなし

友だちと遊動ブランコにのっていた五歳位の男の子が、動くブランコを足場にして、天棚に登る。上で立つ。やがて支えの棒を伝わっておりてくる。固定円木はないけど、子どもたちが実に創造的に、現在ある遊具を使いこなしているのが目につく。すべり

台では、一番上の、手をかけるところに両手で宙にぶらさがってから、すべり台におしりをぶつけてすべりおりてくる。

ある女の子はたいこ橋で、つり輪のように、二カ所をにぎり仰向けにそり、足を横棒にかけて空を向いている。何人もが、遊具を創造的に使っている。

ケンカ

つかみあって倒され、泣き出す四歳位の子。どの保母もかまわない。子どもは泣いている。やがて泣かせた子が「ゴメンネ、ゴメンネ、許してね」と肩をたたいていう。と、泣きやむ。

またケンカ、やはり誰も相手にしない。やがて泣かした子とは関係ないある子が何かいいかけたら泣きやむ。

こんどは五、六歳児。0歳児からいるこの園では、五、六歳児は実に大きくなったのもしく見える。男の子が二人つかみ合いを始めたが、体格のよい女の子が二人、中にわり入って「やめな、やめな」というとおさまる。

保母は何もいわないけれど、子ども同志で決着がついている。これは、この園では実にいいものが育っていると思った。

7月9日 晴

泣き

大きい子は泣いても放っておく、自分で泣きやんでいる方針のようであった。しかし一歳児がトコトコ出てきて庭で泣いた時、園舎の中からすぐ保母さんが出てきて抱いて入った。保母さんは、泣き声だけで、その子の名前がわかってとんできた。

7月18日 曇

実にみなが元気に遊んでいる。鉄棒に必死に挑戦する子。ジャングルジムでは、一人がてっぺんに登れば、もう五、六人がてっぺんに立っている。身長は三倍ほどの高さがあるのか。

下駄箱に実にはキチンと上靴が並んでいる。バラバラに並んでいる隣のクラスの保母さんが出てきて、「うちのクラスはこうだ」とくっつくなく笑う。「むこうは一番年長なんですな」と言う。「はい、年長でもあるし、先生がきちつとしてる人だもんで」と答えてくれた。個々の先生の主体性が実現しているんだなと思った。

「実に、いつも元気よく遊んでますねエ。ケンカなんかも自分たちで解決して」と問うと「はい。先生のところに言いに行っても『そんなちっちゃなこと自分たちで解決しな』とおこられるもので。でも、ケガなんかするケンカは、どうしても保母が入らなきゃいけないですけどね」と答えてくれた。

いつのまにか、保母さんたちがいっぱい外へ出てきた。遊動ブランコで泣かされてる子どもに、保母が二人近づくと、やっぱり近くにいるとつい口が入るのであろうか、さほど小さい子どもでもなかった。

雨が降ってきた。「ほら雨よ！ 中に入んなくちゃ」……私も辞退した。

7月23日 曇

あの元気な女の子！ 男の子に泣かされても歯をくいしばってた女の子が、少しおつむが足りないのだという。いじらしい気がした。

もう慣れてきて、人なつっこい男の子が、また「おーばちゃん」と言いにくる。最初に私を見て「バカッ」と言った女の子も、ベンチにすわっていると背中にすり寄ってくる。「バカッ」と言われたと教えただけで、保母さんは「たか子ちゃんも人なつっこいからね」と真意がわかった。子どもの関心、親愛の情など、いろいろな形で現れるのだなと勉強した。そういえば数年前出会った知人の二歳の女の子は、くつのボタンをとめてくれというのが親愛の情だった。

はだし（裸足）

二歳は、はだしにすぐなるといふ。保母さんは、一人一人の靴をさがしてくるのに大変だといふ。特に砂場で、はだしになるといふ。芝生の上でも、足をちぢめて、素足を地につけない都会の子どもに比べ、まだまだ、自然に触れている保育がなされているとうれしかった。

現実と理論は近寄りたたく、毎日世話に追われると、一人の保母さんが嘆いて語る。

また年長児のみどり組は固まって遊ぶと言う。集団遊びは……と頭から先に保母になったような人でなく、素直に観察して発見している姿が、尊いと思った。

8月1日 晴

郵便局に寄ったので九時ごろ着く。この暑いのに園服を着て……と思ったら、私服のランニング姿で遊んでいる子もいる。何人か、希望したらぬがせるのであろうか。

やがて海水パンツ一つの男の子がやってきて、私のすぐ前の塀に登る。女の子も木綿の黄色いパンツでやってきた。大きく名前が書いてある。アラアラ、次から次から、おそろいの黄色いパンツがやってくる。

富士宮市の野中保育園の、抑圧から解放させるといふハダカン

が保育が思い出される、なるほど、パンツ一つになった子は、プール遊びの期待もあつてか、並んで走ったり、塀に登ったり、うれしさと解放感でいっぱいだった。

6月10日 曇

八時三十二分ごろ着くと、外で遊んでいるのは一グループだけ。少し知恵遅れと聞いたA子ちゃんも加わって、五、六人で川ごっこしている。このところ台風の影響で、堤防決壊などが、あいついでいるせいか、堤防に水をためて遊んでいた。

砂場でなく遊戯場の泥で、くねくねと堤防をつくっている。私が行った時は、ほとんど出来上がり水も入っていた。私が行ったからは一ヵ所増築(?)し……(一ヵ所破いて延ばすかと思つたら、水がこぼれないよう、増築部分が出来上がりてから境をくずした)子分役の子どもが、古やかんや、びんに水を三、四回汲みに行つては川(?)の中に水を入れる。入れる手元が不器用で堤防に水をかけてこわす。兄貴分が修理する。

私が見た以上のことで二十分近く遊んでいた。着いた時は、もう川はほとんど出来上がりていたし、水も入っていたので、何分ほど遊んだらうか。

やがて一人欠け、二人欠けして、中には泥でおだんご作りも始

まり、活発でいたずらな男の子が、水たまりに砂を降らせて「雨だ」とやったり、靴のままじゃぶじゃぶ入ったり、ついに三輪車がでてきて堤防の真上を行ったり来たりして半ばこわしてしまつた。というよりこわす遊びに発展してしまつた。知恵遅れといったA子ちゃんが一人残つて、器でおだんごやホットケーキを作っているだけになった。

9月17日 雨ときどきやみながら

昨夜から雨。まだ小雨が残っている。傘をさして園に入る。今日は雨だから、朝の見送り風景を見るつもりだったが……門を入ると、いたいた、三歳児クラスの女の子と男の子が、たまり水で、ミニカーを洗うように走らせている。わりと深く、きれいな水がたまっている水たまり。しばらくそうして遊んでいる。一人園児が登園してきた。見送りのお母さんが水遊びを見つけて「わー、きたない。先生に叱られるよ」と言いながら通りすぎる。

夢中な水遊び、大好きな水遊び、させてやりたい、でもきたないのはとにかく、破傷風にでもなるといわれると返す言葉がない。そのうち雨がまた降ってきた。主任さんが「雨降ってんじゃない、やめなあー」といって、通りすぎる。やがて受持の先生がやってきて、「おこられた方がいいのー」というとさっさとやめる。

さすが。

人なつっこく若いその先生は、私に「どうぞ中に入って遊んでください」という。誘われて、初めて保育室の中に入った。三歳児は一番いたずら坊主のような顔していても、すーと膝の上にくる。二、三人の男の子がかわるがわる抱きつく。背中からものぼってくる。「抱いたりしていいのかな」と園の方針に不安だったのが、とびつくままに両手で、抱きしめてやる。よく聞きとれない言葉ながら、一生懸命友だちの話を私にする子。やがてかごめかごめをしようということになり、あぶくたったにえたったになり、ふるさとまとめて花いちもんめになる。終りごろ気がついて壁にもたれている女の子に手をのばすと、すっと入ってくる。ああ、気がつかなかったと思う。

もう何分たったかしらと思って腕時計を見るとたったの五分！花いちもんめも終わって、また二人の男の子が、かわるがわる抱きついてくる。足から登ってきて、抱き上げると喜ぶ。三歳児はまだスキンシップを豊富に求めているのだろうか。腕時計を見る。また五分しかたっていない！

いわば無理して、いいとこみせてる私は、くたびれてくる。保育さんの重労働が身にしみてわかった。一緒に遊んだりしないで、危い遊びをとめたりする口の保育は楽である。

そんなこと思っているとき、一人の男の子が鼻を鳴らしてくる。「うんちゅ」ときくと「おしっこ」という。さあ、三歳児だから、ズボンはおろさないでいいだろうと思っていると、一人元氣な男の子が助け舟を出して、「トイレはこちらだよ」という。泣きべソの男の子は走って行って、私が追いついた時は、もう、ちゃんと男児用のトイレで用を足している。ちょっと奥まったところにあるから、こわかったのであろうか。

若い受持の先生も調理室から帰ってきて、「さあ、一緒にお絵かきしようかあ」と、初めて主題活動まで誘ってくれた。が、時間だったので、またの機会にと約束して辞退する。

抱っこ抱っこせめに会ったわんぱくたちが、私の手さげを見つけて持ってきたり、ぬいだスリッパをしまいにしたりする。そして、口々に「また、あした来てね」と叫ぶ。うれしかった、そしてかわいかった。これが保育さんの喜び、支えかしらと思った。

(静岡県立厚生保育専門学院)

赤ちゃんのおみそや

―数育の中における障害児差別について―

福井達雨

☆ 義人の日記

夜おそく講演を終わって帰宅した。ひと風呂浴び、夕食をとっていると、家内が「ちょっと、これを読んでみ」といって、一冊のノートをさし出した。

それは、小学校四年生になった、長男義人の日記であった。(自分の子どもといえども、悪いなあ) そんな良心の動く中で、エデンの園で、アダムがエバの誘惑に勝てなかった心境を感じながらその日記を読んだ。

十月二十九日 火曜日 晴れ

ぼくは、みんなから算数が五てんしかとれなかった、赤ちゃんのおみそやといわれた。

ぼくは、算数ができないから、やっぱし赤ちゃんのおみそやなと思う。

ぼくは、なぜ算数ができないんだろう。みんなは、止揚学園

で生まれたから、ばかやという。ぼくは、そんなことはないと思う。止揚学園に生まれてよかったと思っている。

みんなは、ぼくとちがつて止揚学園で生まれていない。ぼくは、みんなとちがう生活をしている。ぜんぜん、みんなの家とちがうのや。

止揚学園の子どもは、みんな、すばらしい、やさしい、ゆたかな、美しい心をもった子どもや。

止揚学園のかつみちゃんとか、じゅんちゃんとは、ぼくの友達や。みんな、美しい心をもった、いい子どもや。

K小学校の中で、ぼくが一番ほかかもしれないが、止揚学園の子どもとおなじやさしい美しい心をもっているから、かまわないじゃないか。

お母さんは、ぼくがばかでもよいからいい子どもになってほしいといった。

私は、この日記を前に、がくぜんとし、考えざるを得なかつ

た。義人は、一年生のころ、「お前は、止揚学園の子どもやから、アホできたない」「小学校に來ないで、止揚学園で勉強せ」。友だちのこのような言葉に負け、学校ぎり病にかかってしまった、心理的に弱い子どもであった。

あれから四年、見違えるように、強く、たくましく成長した。友だちから、父親の職業のために、いろいろな事をいわれても「そうやない、僕は止揚学園に生まれてよかったと思う、みんなは、馬鹿にするけれど、止揚学園の子どもは、心をもっているんや、そういう素晴らしい子どもを、友だちにもっているんや」と、強く自己主張をするようになった。

これは、父親として、驚きと共に、喜びである。子どもというのは、いつの間にか、素晴らしい成長をし、それに気付かされた時、教えられる何かを感じるものである。

しかし反面、私が重い知恵おくれの子どもの教育をしている中で、この父親の職業が、自分の子どもに大きなハンディキャップを持たせ、それをかつぎ、戦いながら、歩んでいかなければならない、子どもの歴史を思う時、私は、たまらないものを感じてしまふ。

こんな時、日本人のツメタさ、エゴイズムを感じるのである。障害をもった人たちに、連帯感があれば、こんな不幸な出来事

は、おきないであろう。

☆ 私たちの宝として

さて、義人が入学した時、差別が強く、転校を余儀なくされた能登川南小学校の子どもたちは、四年間で、障害児に対する考え方が、見違えるように変わってきた。

約九年前、日本で初めて、重い知恵おくれの子どもたちが集団で公立の小学校に通学し、四年前から、障害もった子どもと、もたない子どもが、同じ教室で勉強するようになった。

この小学校の、吉信圭子という六年生の子どもが、「私たちの宝として」というテーマで、次のような作文を書いている。

「私たちが二年生になったころ、仲よし学級ができ、それ以來、太田敬子ちゃん（止揚学園児）をはじめ、仲よし学級のみんなと友だちになりました。

敬子ちゃんは、同じ六年生なので、音楽や社会の時間に、私たちの教室でいっしょに勉強するようになり、六年星組の教室は、敬子ちゃんのおかげで、にぎやかになり、みんな楽しくくらせるようになりました。（中略）小学校の先生から「この学校は、止揚学園の人がみんな入りきれる教室がなく、先生数も不足していることから、止揚学園の全部の人に来てもらえないのが残念だ」という話を聞いて、ほんとうに教育がおくれない

る事が、残念だと思ひます。

でも、もし止揚学園の人、みんな一人残らず私たちの学校へ来てもらえたら、どんなにすばらしいでしょう。

福井先生の書かれた、「ぼくアホやない人間だ」や、「アホかて生きているんや」を読むと、止揚学園の人たちは、近所の人などから差別の目で見られ、暗い気持ちで生活されたというところが、にじみでているように思ひました。

止揚学園の人たちにも、ぜひ明るい生活をしてもらいたいものです。

そのためにも、学校でみんなと学ぶことが、いちばんよいのではないのでしょうか。私たちのなかにも、差別の目で見られる人もあると思ひます。

その人たちに、ほんとうに理解してもらうためにも、よいことだと思ひます。

(中略) 五年生の時、社会の時間に私たちは、資料を写す勉強をしていました。

敬子ちゃんが、うらやましうに見ていたので、先生が「敬子も地図を写してみるか」といわれ、うれしうに地図を写していました。

私は横目で、敬子ちゃんが写すのをじっと見てみると、大ぶ

はずれていましたが、せっせと写しているのが目にうつり、心の中で「がんばりや」と何度もくりかえしおうえんしました。いえ、その時は、私だけが見ていたのではありませんでした。

組中の視線が、敬子ちゃんに集まっている事に気がつき、「みんなも、私と同じ気持ちなんだなあ」と思ったことを、今も、はっきりとおぼえています。

どんな事でものりこえて、明るくふるまっている敬子ちゃん、その時ほど美しく見えた事はありません。

今は、六年星組のみんなと、敬子ちゃんは、しっかりと結ばれています。

このきずなを、だんだんと広げながらいつまでも、いつまでも、持ち続けたいと思ひます。

能登川南小学校の子どもたちは変わった、心が、考えが変わった。

長男義人の通学している小学校と、能登川南小学校の子どもたちの、障害児観の差は、そこに、障害をもった子どもが、いるかいないのかの差であろうと思う。

このことを思う時、私は、「共に」の教育の大切さを痛感するのである。

昨年、能登川南小学校の運動会は、素晴らしかった。

障害をもった子どもとまらない子どもが、同じ条件で、行進も、競技も、マスゲームもおこなった。

たとえば、五〇メートルで、障害をもった子どもは、必ず二〇メートル、三〇メートルおくれる。その子どもを、障害をもたない子どもが一生懸命に手をつないで走る。この障害をもたない子どもは、いつも、後から一番である。それでもいやな顔一つせず、誇りをもって手をつなぎ走っていた。

そして、ゴールにつくと、さきにゴールにいていた障害をもたない子どもたちが、この二人を輪にかこんで、クラスにつれて帰るのである。

行進の時も、マスゲームの時も、一年生の子どもが手をつなぎ、歩き、おどっていた。

この運動会で、特に感激したことは、もう小学校の先生や、止揚学園の職員が、何も手伝わなくてもよくなり、すべて、子どもたちが、共に力を合わせ、その運動会を進めていったことであつた。

私は、大人が手伝わなくても障害をもった子どもたちと、もたない子どもたちが、自分たちの手で助け合いながら、物事を行っていく子どもたちの場を、理想とし続けてきた。

この花が、少しずつ少しずつ、この田舎の小学校に開花しつつあるのだ。

長い時間を要した。忍耐、忍耐、忍耐の時間であった。

もし、乳児期、幼児期から、両者が、共にの場で、共にの教育をうけてきていたら、こんなに長い苦しみを、私たちはしなくてもよかったのではないだろうか。

乳児期、幼児期の性格形成期に、築かれた障害児差別感を、打ちくだき、共にある場をつくらうとすることは、非常に困難なことである。

しかし、教育の世界は、「どんなに困難であっても、可能性がないと思われても、期待がなくとも、その中で、可能性を信じ、期待を持ち、努力する世界」である。困難だから、期待がないからやめましょうということではない。困難だから、より強く、はげしく、共にある場をつくる努力をしていこうと思う。

教育の場で、人間の生命をおかすような教育にぶつかった時、生命の大切さを教え、人間の心を豊かに育て、心の世界を見つめる。そこに教育があることを叫びたい。

教育とは、頭をつくることではなく、人間をつくることだと、シミジミと思う。

(止揚学園)

第五回みどり会夏季研修会お知らせ

今年も左のように開催いたしますので、多数ご参加ください。

期日 第一部 (講演と分科会)

八月十八日(月)十九日(火)一泊二日

第二部 (講演と話し合い) 第二部に
ついで

八月十九日(火)二十日(水)一泊二日

場所 福島県飯坂温泉 花水館 〇二四五四
東北本線福島駅下車

飯坂行電車またはバスで二十分

内容

講演 周郷 博先生

第一分科会 講師 津守 真先生

(お茶の水女子大学)

幼児の発達心理を中心として

第二分科会 講師 本田和子先生

(お茶の水女子大学)

児童文化を中心として

第三分科会 講師 平井信義先生

(大妻女子大学)

幼児の情緒発達を中心として

第四分科会 講師 藤永 保先生

(お茶の水女子大学)

幼児の知的発達を中心として

第五分科会 講師 大場牧夫先生

(桐朋幼稚園)

費用 参加費 (申込金を含む) 三千元

宿泊費 一泊 七千円

定員 三〇〇名

申込み 六月十日の消印から受付けます。

参加希望の部、分科会をはっきりお書きの上、費用を同封(現金書留または為替)して左記へお送りください。

宛先 東京都文京区大塚二一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

みどり会夏季研修会係

なお、申込み用紙、予定表その他、ご入用の方は、返信用切手二十円同封の上、みどり会宛お申越しください。

幼児の教育 第七十四巻 第五号

五月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十年四月二十五日印刷

昭和五十年五月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いいたします

企画 日本幼稚園協会 会長 勝部真長 米国幼児教育事情視察旅行

日程期間

A コース〈9日間〉昭和50年7月27日(日)～8月4日(月)

B コース〈9日間〉昭和50年7月28日(月)～8月5日(火)

参加費用 Aコース……¥ 295,000 (視察諸経費・通訳代含む)

Bコース……¥ 285,000 (視察諸経費・通訳代含む)

※昭和50年2月20日現在の運賃料金、A・B各30名以上のグループを基準、視察諸経費、通訳代、コーディネーター流ホテル、貸切バス代、3食付です。

Aコース：米国の幼児教育の中でも一つのポイントに傾わず内容に変化をもたせました。中味もかなり濃いコースです。

Bコース：幼児教育の視察ポイントを一般幼稚園にしぼりました。その分だけ観光もお楽しみいただけるコースです。

視察予定先

スタンフォード大学附属ビッグ・ナースリー・スクール
カリフォルニア大学附属児童研究センター (パークレイ)
ペニンスラ幼児センター
モンテッソーリスクール
カリフォルニア大学幼児開発センター (ロスアンゼルス)
マーチンルーサーキング児童センター
ディズニールンド
米国家庭訪問 (ロスアンゼルスもしくはサンフランシスコ)

詳細パンフレットもしくは問い合わせは

東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会 会長 勝部真長

又は指定旅行社

(株) 日本交通公社 海外旅行新宿支店

〒160 東京都新宿区西新宿1-18-8 TEL (03) 346-0181(直)

米国幼児教育視察団係 白井・国松 (03) 346-0166(代)

新しい遊びの空間を創造する

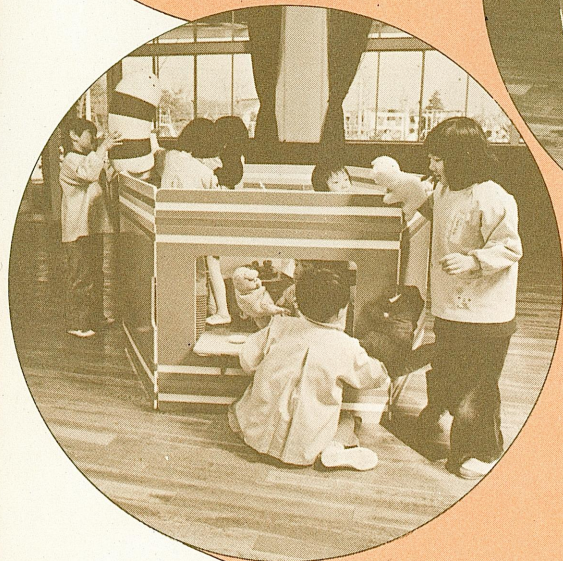
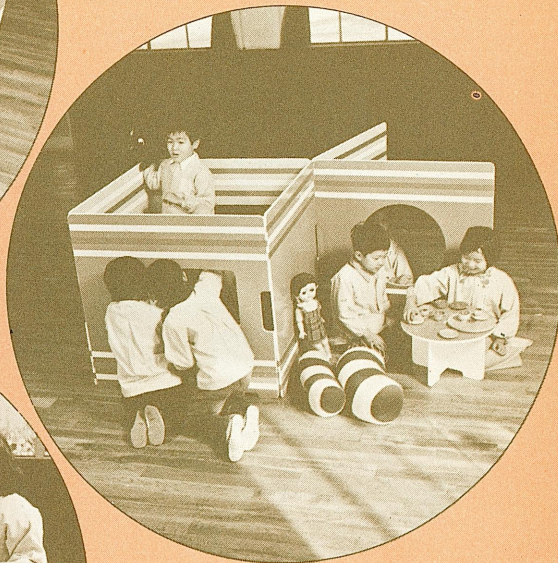
好評

プレイサークル

(意匠登録出願中)

発売中

★簡単な操作で、ダイナミックな空間、
変化に富んだコーナーが作り出せます。



●パネルー高さ90×幅90cm（厚み1.2cm）。
シナ合板クリアラッカー仕上げ。
黄・緑・白の3色塗装。

●ベルトーナイロン、朱色。

1セット（パネル6枚、ベルト6本）
（丸テーブル、取付棚各1）

58,000円